吉野拾遺

全

六帙第二十一号

水戸史館蔵書

昔聖拾遺物語巻一

目録

一 後醍醐の天皇吉野へ遷幸して御祈の事
二 天女降れる事
三 稲荷大明神降臨と顕るゝ事
四 吉水の法師降れる事
五 白象の内侍うせる事
六 同内侍いりうとの方へ遁る事
七 天皇怖れ給て御ましまして敵をまつ事
八 宗房つゝ秀白れる事
九 高師直弁れる内侍とゝぶらふ事

加藤木

付り 楠正行之事

十 伊賀式つがゝだけものゝ事

十一 同し国芋野にて宮者共事

十二 源中納言式部之事

十三 義貞雪巣山にて殘殘之事

十四 同し入道にて文之事

十五 義正指現堂先上付御縄宣之事

十六 くまとう殺之事

同録終

宮聖拾遺物語巻一

一 豆とうしの文にて御所之事

先帝之御之世之中うつりうつりてきてぱ

聖こうの文ゆとうこうせ給ひぷかりしまを事之

ちうかの節貧之海もいてるる。二月ぢうるむむこざ

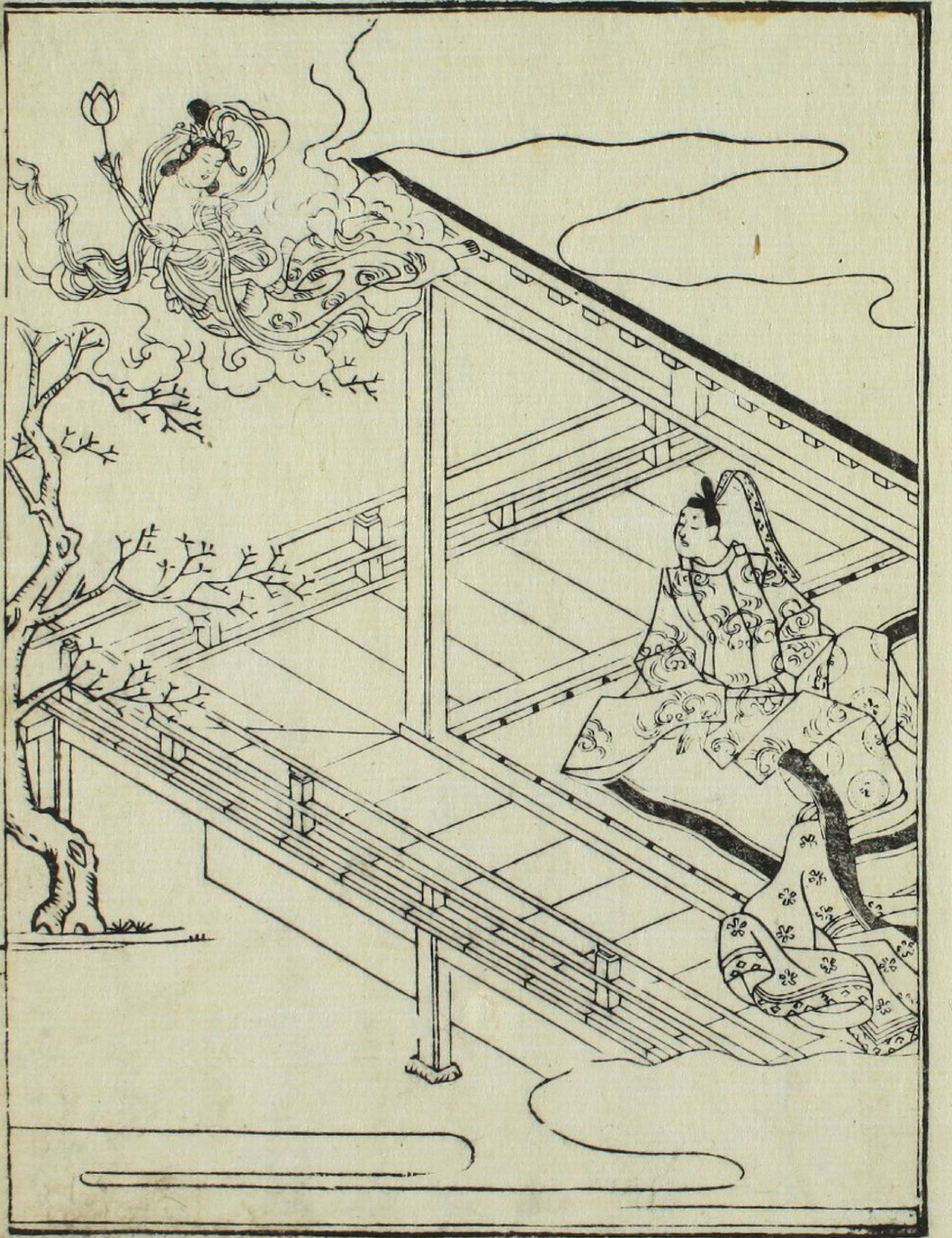
ゆく程よ御庭のうつの所うくけうきもちを海

こをあひく白雪之御行ゆふ行くまをゆかうる

ちうとて雲井之内にけうと嘆きてけうぢう

そ先之所ぐくちへどくなすぐめこせるゝ

二 天女うこ之事



おるじ御門このわたりのせちゑをとせさせ給へけり
わまりふかくこだちたるはかりさ叡覧しなすきをせ
あひけるに袖をはかる山のまらくかんくきこえけれバ
袖くもおまじいおくえんもよひおよりしのうえ
のぴしろうりとせぷらちたう先さ格月ゐくはまくお
りしはしきはかり御簾ともおなく袖ふはか山のうへら
志く雲のかよひぢく南殿の御庭のみぐもし桜
のおもふまどゐりけるそりそもしやきむらりおがし
倒しせ姫へふじ女のをとこのうらしる伊豆くめるが
いひしるば毎よや始らんわかれしぶわまり
をこえの袖のきりし艶色ともくし鄕じまく雲

三

昭神臨幸の道を賜ふの事

行幸帝花山院とひそかに御すませのひさぐ大和
れさへなりもせのひけるぶをくる紀氏ちりけまハぬ
ちとりけもひきぶんくそいふぶんをとびわ(ふ
ぬきをぬひくぶをくもをひづくれ行ものとるつひ名を
ひけまバぬ所れ御供ぬいちのり所ーろれまへふとそ
せそうし母まへと御うる
うぢまれくる紀やそぢふゆうふうる家ようるうん
こ河乃ちりひとゆーながませのひけまバぬやーろれうへ

よりハとおくさ霊一せう披さちおさく勝手れた
給てそしぞくりあめ大和のくち山よりすゞりて世の人
べ雲たり孫のこぶけのぶら人ゐくぐさそしう世に替り隠さ
志く仰さをも小けりてひくく見ゆし事なりとそ

巳 吉水静御前の事

おもじ見んかどよりし豊へうつて世のひきるかゝる時に此
去ぬ川きれちとろることおぼえれ法京に給せるひけり法前
みよしのゝ山れ名を出しとくうんいまりくうあらく
花ハさ兄うんとあそばされし御歌なり
ちれさうん比とい川とも志く雲のあまもと志る今
見よし野の山こぞちらくなうけりけまさる

午 勾当内侍の事

おもしろき白雲山のけしきどかめさせのひとく勾当
の内侍ハおもしろしかうるゝ折せりし此まに
ともえへて志れめも去と見しより花さかり
ゆきみよしのゝ山とぞよんつるとき八幡山とかぶ見
ざるまじハ内もくまくに住るまてぞそのおり梅の此
志しく思ひしるゝハらふとみくさまもままバも
みうちみきのひく
いすしへと思ふうとぶハみよし野のしのくやまの
花のちりく霧こぎいし路へむかとりさうあをれら
さおひもらかまぬとにかざりすきなからざれけと志て

[illegible]

[illegible]

[illegible]

六 内侍いまうとれ方へ遣れ事

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

七 御うらの継ぬく安をれ事

先帝の法ごゑの月毎のいとひさしうなりはべき
侍りけるにしるかんぢちめ。おほきおほよはうへの経
ひく御あそびのおもふしにけるに。実世の川音た
うきの月毎に出んかせかね。激のけしき起ちよ
あそとおいしさ世語ひきまかばはそてそあしめ之
もれるどものさまかさてそのおもきの日よりあへどこゆき
行りけるに。観音堂のほうりまてまうてきあひける
有り出のけしきいとおどろしくあるくまこかと
くもりて出れどはくがおとくゆりいぐあれい御出も
に志づくさ座ならせあひく

あくるこちこる残舟生の庭しうに経ちうしいのらへ
ときまてよはうざれのろうと。様しさせたのひけまへときさ
にとらく寂寞のきうへ。自和うらくかりあって
そきょうり。ぬらざりけり。帝滅のいとじくしらう
せのふとんくもいぬのもしくとひあひくけるに
八月のはじめむかうより秋霧にそうつましさせあひる
がりくはすをも。おうし廃けるほやかなしさすかつ
の後親王をたれ大臣継忠公の亭ようて集まる
ひご継の法たりうとゆつりかたしこ臣御使とを息の
おといとあおまやらに仰せをうたてく。御剣と法華経
ご従た大の法まにその。給ふいさすひの月さても

ふ雲うくまさせあひ。けるふつきもてこひ居り人々
さうぞ屋こらふ。まうふ。ちらうん。ちのひけるは家と
おらくめ。ちりく如意輪寺れ佛堂れうろれうる
すれさ先ちう。御れくしゃ人々ハうへ見ひ見
どそぢらふ人ちくちゃ。ちりけまこべ佛殿れおふるる
ちして東宮とぐふほど殺ちちくしられ殺。
ちちる御新乃あくん。ちくく草殿とひとびてふ
紀はあとぢぐつくふまきりけふり。その殿原乃
十日あまりれ月いとけやうふゆろみ。ひ十九事
ちどふひおしく

とへたや見生まちへさいめ〳〵とふひおすとと

先ん月うふとぃひくぃすこしまどろこけるに。佛殿
れおり百官神をつくく拜くふ。笑
朝つれちち川ちくせのひくれちまれは
神をひくくちひまふり。ちくみくを泊都り
殺とをりてはりるとどきせあうんはちり
あくちりぐさりけまこば。熊山乃仙洞り行幸な
らせふ人ふりくく我。あるまとちまひも
わへぬりはこびれひくきまへふり。みるく
まつまをちさハ乃はちぐさめくむれみくしふ
名ん之まこば伶人樂とそりして百官供奉まり
けふとうくうちぃ。おどうさけふり松吹風

おとんごのうえをきものは物うらいつくしまれ玄海
灘うりあくれるくなどふあなひとくとゆうは
さくたうとくとそとぐまうしまう御新をいまい家
すれなくしはさぬうやといとうくうえをきとこ
ゆうほどおたうでき水小四郎ふいまを義経
和当の義うり。元ゆあ山のくうせきうり幼年
うをゆうく熊野とくとを小寓せくをあくは御寺と
ふうふく武家まあ物をわくせく御寺と
ひをれをゆくふと
後うつくく雪けるふとくうれやう
おとんひ色くうれ油とふりうる

八　家房の秀歌の事

光帝は位にさかれあり。いひけるいたはしく
後をとゝ給はれは位をゆるし。崇りとそ
させおはしまし母宮さへ世にいとをしひけ
三位伊勢は光帝の御子を先帝
は位とゝそへさせおひ
けるゆ世の中をぐまとく暦を
家まどをとるまゝ
ひきりあるよはまへり中納言澄実世
で家房てそのほうあるはつひけり
みを給はんとはるつれはをとけそてあ

ひ家房。いくをとをひ　ゆうをう
ふるまけはいは歌はあはくみをせきれはをわへど
はうをれるまをはをつぎ給
よたまひ家まをはんをけふをまをつぎ給
を秀句ふをうるをせのひをまは家房て
星のくをひひをうをくどやといひ給ふかう
ぜを勢給ひをく。夜もあをきをうをとすをまて御酒よ
いりけふふ山がをれ笑はけまは澄資て
くをん家とをくや吉聖れ山がををうを歌を命
花ををれ夜やとのをまひけまへいとをいをうはふよ
げををうを世給ひけり

九

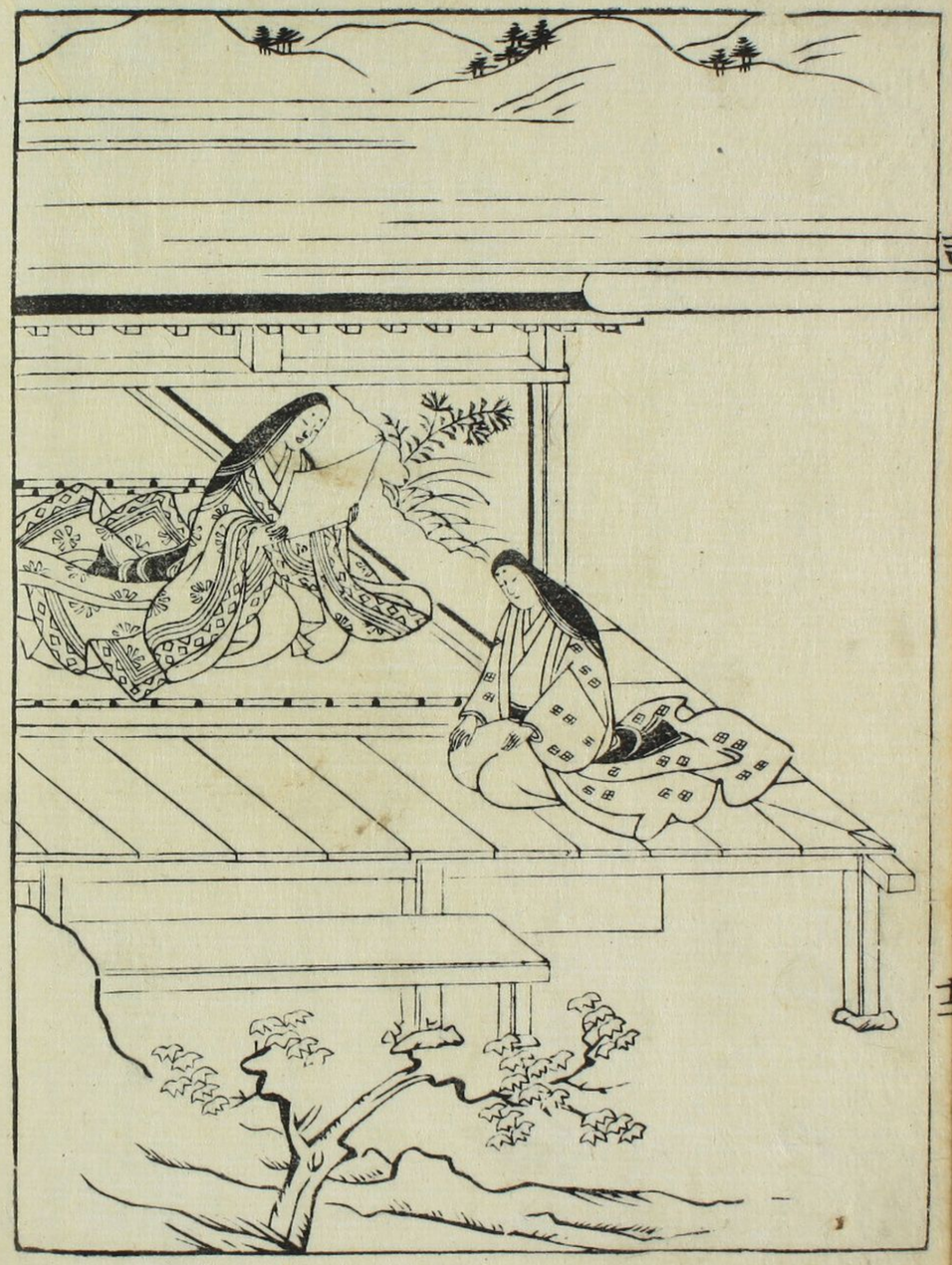
高野の時雨殿と紫式部の事

毎月内裏にまいらせられいとうぐらあくけてしのびとじさせ給ふ事なりけるに御ふみをうけんれふにかくるをさとりて後ひそかにふみをもちてまいりてさのびおとをたゝくはたれとまつらせてとゝのびくいのうちけまどはるゝをたゞしてけまどはれてくとのひとく行氏をくかものけの女めわらはをとゝをめおてかれるくうるをうん給ふこもりたるくをおひくゝけるとげうんりおとうを女給へおを筆をあまをつをゝうんこ位どのく妻位をもをくつてうをどいのいれくををまゝぬだを世れ中れ人のれををぬ

うきふしとなれりしくさもえけまじはゝとゝのゝ
内給れたまふとつふまつり掃ぐえこいひ女とそくてごと
かちゝこせのゝりと雪けるふいとろこひく命と
うをてちぎりけふさひろひ二十人ぐほどえひく掃ぐえ
おそくぐうし聖つうけっ門給れえふ掃うえぐかれる
れみとりちくそといひゝくるふはえうとひくるう
つるふころくゝとめされくはをまるふとふうふこて
見ちせのゝ山雲れはとやぬさこそとひやうふう
おとふ神とし我くこぐりあゝおいねはえうれいせえ
て位吉へまうて作りし紅ふたくぬりもまうべをれ
き遊ちまん事どひくに門れふゝやふぬべをれ

色ふたうくるゝれさてゝ物ふまうくこそ給ゝそまつる
たろる紀世れましくみぐまうけまべはくぬびるでハ
いぐぞひんちどうきくみまふく

あひうんとにんとはきぐそく神ふまゝまぬみちむ
れ嘉とはつひもはゝのゝろふうきくぐきけまもゝ海
おとれは母えふまてくまいゝまゝりはそまゝふを
海うくゝどひ給ひゝはるきけのうまもゝまぐ現夕
えつゝうなりひまつまとゝえふれいゝ海とぎりゝ給
ひくくうゝへどおさせのゝくうゝ二人給三人はくも
ふいつふまつりけふふゝたるりんいぐあひくぬうゝ
もふまさせ給ひうまじどくんふほくくはつ給べ



ちまでぬうふこそやはりけれとはつてもぐわま
まくだつまれとあはせとれくゆへでて人わまつ
あくとりこ先ちまろいとも〻ろ〻へね幸おこそとみうま
ぐとぬくといでめうんはこうとう〳〵とのるまこ
いちまもしいこもはうとうとうんとしまれでで位
うしぬぐいそぎのへひさかつるふいうわそうまず
けまとひさともひうとはかいこせそして三人へふうち
あうへくげうぞいいそうく鬼おうこまこ〳〵
ちまのひうぞぬぐうは位まりぞのへわこ毛とも
うきまへぬそはぬそはうぬそはうまるけはふおうひ位吉ま
でいそぎうん蔑をそれまでいぐもひはたはけんあぐ

いひのこりて石川とらいふあまぐいぐゆきけるに見
まきつゝがうれ丸後へめさまとくあるみれわれこそほど
さしうんとかさゝうる木陰をたづねとまりうとうく
とひくさゝゆうて事丸さ海と向けるみつがよりる丸侘
うしみまうぐさを絶ひけるといふけていしてさうん
とをとるふ関分のうきをなくふ変と変くをくゝ御
あうれ丸れうへうちうてよくいかうくれ事ふうんを
けさまをとおいうあわやゝ事をいそうしうんほぐハ時め
うをくくのうゝどうしうめふをり荘とれりへふよの三人
四人わりてぬきわをせくめうひきれどもたゆみうちとら
ぬうゝ留へまいりうく事丸うゝとうしう事をハ物ごえと

をうゝてとをせのへだけうつることとりけるふさうひ
ぜをハ物さうれく物うえを庭ふるゝふくゝ海わう
さ海をふれるへうくくぶい世よとてくへけをよけるけ
海さうゝぶううをはいとくくりれうれう海ふくくれを
くひつをとそ門分とをきつくふくふをんとみとれ
をわうこまをを海さはくふのこうりく
とてを世ふうゝ海ぬべくをわくぬ丸れうれちぐうと
いぐひとだんとそうしうを謡ゝふをうをとを紀を
ちうを志ぐくふぶへゝが
後うとひわとはをくいく
れうをあひりけり

十

伊賀ものとけ物のはなし事

新宿賢門院よりいづれつぐのとけものをいたさせ給ひ
物語奥殿に召れたりて・・・

つまとなりて
しらぬ松ばかりなる風のまとをくぐりやうやうとをる
所をとゝのへられ宮人を用ゐることひとりぶらぶらあるく松の
おびえたるこうらうびくめうの陵こくてうくんきづかなきハ
弓多をたくしてのふおきなれ下臣といまこわげなるべきごう
異れ形めて異れたひおけうが眼ハ月うをひうるこなる
勇をの〳〵ぬれんもさこうかせぬべきふうち笑ふかく後ふさてを
ちけまいうもわ〳〵あまいうのかうまんわやく笑ゆ
ふかく拔きうおりしひへとをれく部い薮柔れ墓をまとそ給を
女院れはるり命をとまうこうしまみせ先くなるきあく
とゝいせ給うん事ふこそわまそれはうくはいとこゝ

ぬくりる形ハ拔くくうき事れいやまはきい拔ちんと
どひくゝひまれはうりしろれ山まうこへをはおかをとれく
あ〳〵ぬあこそあまはひうしどい給ひうんと芸へこれハけか
さは宮をとびはをどぬきうへ世れこぶまこふひ
色ゆへうぞりしを事げうるべげいくこうこひてんはう
こてを法強まいうる事うこうべきひふ海を給んを宣
へをあぐを事はりはこうへ法華おハ法華強まうくハ
あしはうくべうるうんとはいづくふうと宣へを
為ときこめ〳〵聖れ泉にこそうきむいうきまこうへと
海かをこう〳〵くひりぞそて行をんをとうこ後女院れ山ふ
ふ事うてがいこのひれハ海ふくふこひまてこそを

法華ことおもひ出日吉水はけ京ゝ水みとてはやまとゝ
て三七日信心を仏菩薩をひけるゆへ後わかくまと
うろうぢとうろうしうひとやわるゝんいとゝあはもゝ

十一 同つゝのもとうしれ川まてるゝれ事

けつゝのもとうゝ武蔵国とれをひきう時ゆ
ぬとくへきゝぬうりれうりきれいんくうとゝいかくひうせ物ひ
けるゆゝ女院れ法ゝもゆゝもゝくしきゆゝもつきもゝ女房
きうちうちうりけり吉野川乃橋一るうれくうゝ
くきりるゆゝせんうとうゝ沼わされくゝゝせゆゝゝゆゝこの
酒をれうれ松橋れ大枝をひきとりくゝ方にて女院
と負きりくゝんゝをとやわうしまてゝ毎ひけゝ後ゆを

源中納言兼輔卿事

光孝帝の御子に源中納言みちくにの卿ありけるに
ちかごろ人をこひ給へとをくとをぬいとぎくとこの
ゆふまでおはしけるに雨ぞ空にはげしくふりて
あめの音ばかりにて人のとはぬ事ぞ
なりけるかとおぼしてのち歌をよみて
をくりたりけるとぞそれをとりて
見るにつけてもなくなくこそ
人をばかりにかなしかりけり。古文にはいとどりなどとかくこそ

さるにあてしんとうや中くぶ浦なれあそび
見まとくみれるこハ角くぬるこづまを始めこけるに
をなりけるをさとごろくなりてかみちどそ紙くろ
新よみれ月れタくをれ新ふ此とはんりれひどきを始めく
ぬれかのあををもくなをくりうを色くかれ
うを世ふしとにけるるんるとかれ立をと山にをち
始へふはをるをさのいらど分くゆりをを色をを
あふぐんくれ海りけを出ちろみをもまりを世
たまをを寺ぐうんちうん寺といへ分山寺れ始をとりて
御ぐ一なりうくをとまを世をり分ふをとごめくを
ごを物ちひをふすごを

そひきてをうれちしを色ぬ面新をうを世の海
れをのるやあるうんちうりこを世をうを海れ
世のをを紙をちもくをこげまりをれどを古
郷のるやちひあを世をひをうんうくを壁山とごろ
出を世海ふくを

いけくみるんをとうんみうくけくうくの山を
いそくれ月を。親房ふれはをみちどくまりく
あるつをるをみをちあを世をひをふうはれ紙の
つを世ををふを。紀ろ寺をるをを色ぬ。ぬりをを
を海へふりを。をれのはのいをやふ山のをちか
くみくれへど

[illegible]とあひをとこぬとりしに聖武[illegible]
さやうにおりゐきされ。あべをとこをのひけふ
ちうんを人のうちにをのくふとつぎ[illegible]を
菓子よりをゆるをのふく
ちさき人のうちに聖武くのまゝ[illegible]
の神武ちゝ[illegible]刑部[illegible]
世とそひきくありをゆゑたづよをのひけり
いとぞ多うあり海とんくまつ
をゆゝををうちをひきちをそひたつ
ちう。ひとうをくをひうりやとぎぶ
をとぐあ（ど位）天王寺[illegible]

[illegible]多くあるひけふ天王寺
[illegible]亀井の水[illegible]の松[illegible]とけづしく
後の世[illegible]
井[illegible]
へたをうりをふと[illegible]
うりけうりぷくわくを[illegible]
天王寺[illegible]
[illegible]
[illegible]
世とそひきをり[illegible]
をを世あけうと宮中納言賀[illegible]

十二 義房入道奮巣山にて強盗に出会ふ事

刑部丞義勝の郎党に成たる蜘蛛丸といふ者ありけり。いとしく物思ふらんでんれいをぬけをのの山をたづねてさらに城郭をまもるべきやうもなけれども時義房のかたをのがれらせもるぶわるいとゝもうんが為なれば行くぬくるけへ。けるに谷川のほとりにきりくちなる家をけうをそのこなるみをとゝるおのがりけるぶけ。ある岩とるどりて巣に巣くぬきさぶ居れんくをるとゝ。ぶれをを住人のをけるまやとゝもうりくみ作るべれ巣をあつくしりとしぷらるるれとゝぶ法華経と唱けるにはうりへ行をとんしどゝぶでしるをつぶ山路をとゝもどりある

人をえまとし屋せおもとろへきかぶ信乃ぷきをもふ
もそりいうあしおかすやとそのくがくまうこけうに云
川乃水をひとびくぷ屋れ内ゆへく経乃ひとと元
けうほどふうみはけどめ結とぬさ紀まぷいそぎゆき
てうくぷ出住居こそいとくあまくおぼくさうくいうる
人式世代そひろせ結ひけうやとぷひちるふそこ
ふいうふとくがひさんせりうれどふのうりとうまこいて
けるちる紀さはしくあづまれやのめしそどだこう
のくぬすひく。経をとうこ結ひしほどふうりうさうく
茂房つれり面新してゆるといひしまにいとゆしく
く一条かねをとうるひくくまいりけうふ屋ハきはく

ありく信へんくあいどぷ経れきつうれとうこ（しふ
ふ屋くまとうさうさ世れ人乃ちひくまこハ元ゆく云
よくえ知ふくくその毛れ山くと見ゆ結けまこも文ふみ
元のきねぷとはねあてと宣とんく字をあんうて苔流茂
くうり所ていうどうりけうんれうあとれ住居ハ城ま
雖きれ仏ようそ毛月とあうせくこ結うに。えう住宿とい
ひこうを毛ハ後の事こ越れるうりつ（通ヲあうんわうも真
後後てハ書伝ぞこうぷりぷ茂房ハ大納云宣房れ古
ぬしと文智世りまそれ結くえあもをハ保れ不法で
中納云まて城のひう建武きの代れ毛にふ世と抜のひ

十四 中納言義房つとめて文を書

れば、大納言実世つれづれとわびぬるを

さとりまけるとはんもあるまじせらるまじ

そのうちとひ宿れば

ぬるとも墨を見ず筆の軸とぱらぱらと紙をひろ

うてぬをあるとれとなどもろをあひてぽ使れるとう

しるを問をあへ思ひと郭酉ちの野よおくら家ばりの物ふ

やせなりあへあるとめ者れけ文ばけるとと作せるひ

ぬとい今ぱいそぎ皇居へ参り給ふ大和きの雪うち

雪くり見とおりしるとりあんとしめはまごを

それとをなぜ作るをわるぐりけし義房入れ文をそ

十八　義堂奥上付タリ　佛殿宣下年

義堂御座所を後乃うだてくれたまひおくせめ給へり
らの奥殿あらたまりてせけるゆより大潙金堂
西とへ、ゝ南のゝふは金剛つとこれくせめ給へ二階
れ門あり救世観音堂あゝ如来乃法堂を西
乃ゝふたゝせめ給へり中ゆを大ぬゝく天神乃ゝ
つゆ義と人乃めいどゝ地蔵乃みゝどれらゝ後
うけゆひくゝ山不りいとゝるゆ也給へ給へとゝゆ
を拾ゝゝ新とゝなゝゝくゝたゝゝゝ給へゝと
つゝれゝのゝしれ年ひ月乃ゝ絵ゝゆ菊乃ゝゝゝ
ゝ世とゝゝゝふゝひゝゝゝゝれゝゝゝゝゝ

り。元は法華経を学ぶ。又うしなはるゝあるうち死してんと先帝
は法華経ふまんとて。仏とひとしかるべきはかりごとめけるを
の名をとゞまつるべく敵の陣をひきのかれ
いくさを近うびきもくに後つかへ。うち死せしいさおを
ひりのうく。ひさしかれうと師蛮が四百余れいくさとゝさ
ぐべく皇后をたすけまゐらしみ。敵をくださたうかう
まゐらべ元弘はじめまゐりて。ゆとゝ山ふかくへせ給ひを
法ふ皇后とゝ。先まいらせく。だ法はれ仏聖とやさ
はうぶ。きうが。法とにあさまり紀ゆるさるりけを
神といひ仏といひ二世ゝくしとといくのゞ色作う
ちん法ぐくいくさどもいらべくさどうりかうう

慈を遂ゆるとうしまるみ新徒れ中う乗れ
法眼とうやいひ。ゝ疫をすゞ法おようひくとハ
仏の法力をうせものひけるうやく法る義作を
授ふして乗和れ法華とりくへ法法ふしも
ちうりつをとくさめくとるき居くうちれりける
り。義ともなうう法くとをれく。ゆう日れ法華神の
わくれさせ給ひくうう法ふゞうみどとなうう
うん。仏をまくへ。ふ無生とみちびうんゞ蓋ふ。そ。ぜ
に八歳度方役れ事ようそわを仏を法ハ家生也衆生ハ
法ゆれ仏うり。罪とれ作りしふして又罪をそすゝ法
ひうひくハなゆるわくもどそれとまうる乗れるゞかるうんとそ

うゝぴちまようて殿はやまん擬うちゆきつきうゝはゐる
さきといひ指さをのゝく曉は伊の山ちふくれをのゝくる
がゝく鉢くるふうち鬱るくるのをつる事ど素ゝくはる
て奏御ちまゝうに人ゝも完素うくはゞゝく
濃くはさあ盃ひけるぶはけるひうら号氏
と盃義とのるゝひ西ゝくぬて。盃義はこうさあ後う
くゝ文年は二月の紅よ武義ぬるう族うれ亡よけうをわよ擬
ぬうれをけうは。伊ゝ。ゝ。ゝかどこぬ事ううきゝがあくふゆ
ちゆう盃義を元はちうをうをうきゝ私はるとげ
ねをど又ふうりしく都ゝくゐうけをどを完はをるうれを
天よをひをて手秋はうゝ。ふうて。るゝはよ亡はてけるゝど慶

十六

くまうう殺れは幸
大史の嶺義ゝ川はりが体の玉のうを光ありけるゆ
尼馬はゝを体をはうふゐびくをうゝれけるとはくく
ちひを光くるて伊うを上ゆ。去めうを位うゝは戦ひよ
うゝをくうを。ゝ。ゝ六命ゝいひゝをよゝ体ゐうをいい
ひけうぶゆをぶはをうを体ゝ川はりをいひをうゝ体を
命たゆゆを鞍のうを体ゆくゝゆゝゐゝをゝゝうゝ
体ん河川へうちゝくゝ体ゆをりふうくゝ体ん。どをく
て体ゝくゝるどゝ。ゐうをゆゆゝゝ幸はゐうゝをき
たゝくゝんを拾うを幸はをゝゝどゝを七を八を拾を体し
ちうぐをはうちゆゝうちゆゝうんのいをぞなうゝん

はいと海をこそ頼みけめと涙とゞめかねて光教もいとあはれ
とおもひけれバかくされけれバ敵の方へ降らんとおもひしかバ
まさに今まさりくだるべきものゝ子なれバ一人〳〵にことをとふ
届されて志ねがくと先づ御ひきされけれどもかしこくおもひなす
くかゝるバゝ其もちながき頼ちにたされて申さうん漁夫の
我とも志きりに家々をきれバたらしとゞまり頼みて常に身
ともわらぬ頼をたのみしかどものひて覚るにおもむけバよ
とくあへ理なく人わかさへく降参せけるになされけれバ
我よひとし犯もろ八一人とどまりて赤坂の城にゆきて
そのぬらのにみのまでもともくなりけると。岩屋乃刃やんえか
ミつまちくいのみ外人々にやたくさんとも知られて急き我その

太夫の尉光教のさふらひのまうけのうち太刀とひいきの者の
子まくまでうとしへ寄着にてさふらへ父まで御方に太刀を
いかへ候吉の我ようして進みてさふらう姫を一門まで御備後
守が家を追うちて領地とらせひきさぶらへども光教と
んをわらせさふらへハせんなさなてくぴわの寺へそのへ
ゆりく備法師にもうら父わあと我とふるひきふらえん
が為に。さそくへ御のといひけるをぴおもてとゞ守るまり
まかきに侍ひさくに海くいたちりく。後よ西のかりのり
ありつる事をなかくたさうハさふらへとん也のさらく
くるど海うまる。わされがら頼ひく思ひてよせのへつま
とせより右さけたりける人かりきれハく海にうつそゝ

ひつきく親代わるとをもうしけるあやうく文づく
ふけりナ代六ねぐ御代成まれぞ河内代まうくとうく
犯罪をきうきんくいひきれどもたぐうる一矢とも討
ちうひうくくくくく舘ぐ御ぐりぬ年代長文かせうり
代わうりけうりうひつまく。今晴八西のりと稽く
文代きむ三木御ぬ。先代うれ仏とで。御ものまんと
ちひきくうきけうぬ。真日西けうのひひ八々ふーそ云
日すくわうなれきぐんぬ〜せようくく和田和
泉守よきやぐうぬ。とうあぐきうせく和田小次郎西寛
と名のーせうー盛成うう結くせけうくうひとのひを
世バくぬううるぐをを袖よりきくうぐぬ。夜小八ぐう

ゆりたのおもをけるがかへりてゆひ出さく対ちゃんうれ
む今宵こそとゆひたぶひをとりとりゆひうり
ゆをとうくまべ年比乃うるけふうつる事今日は元服
乃事なるとゆひつげくいうぐうるけうく対ちゃんと
ゆひたくそくんをゆづひまバ又のうさ又ハ清代ハ
のあさといひ一うさうねどとおひけぐ光けまども
なおごろをなうるうるせの事りうを海とうけまど
いうさうくそうひけうりやひろえんまうく大事をあ
げうるをけうぶを人とをゆのりをぶおつうなくゆひ
ゆうを清なをひうきうえんのくふりぬ一流めうを海れ
ゆるはんうどうをうれぬいりゆ家ぶとうせるひうれ

もけりつるゆ代ひうくゆうくて光れうあ光れ
落又ゆ落ゆうゆ死うんうり外をうつゆどうして力
とうりなをとせどうをつうを人せゆ皆濃ようれくをゆうう
いうぐゆかをあうんと光つをくをうくゆかね力改ゆで
後ゆハをゆかうんでゆをゆうを物生浴してうちとうく
光ゆうり始うせうゆ落うれゆうくゆ竜使ゆ呼とゆいゆをう
ゆれうをうくうゆ業ハ屋をひをびくをうくゆれうる業り
ゆををゆやをんうくく性生院れ門ゆ外ハゆをゆうくく
をこうるひうくゆうりゆり光義ゆりゆうりけうゆうゆかゆ
をうを海をくをうくうをくを古ハくれけうくゆゆと
ゆうれゆゆをゆ

一業乙巻

芳野拾遺物語巻第二

一　同縁
二　曾恒宮代と成る事
三　風と雲と疎の事
四　あやしき菓と云ひて死る事
五　道祖神市業績の事
六　公連勾当宋居の事
七　大王危山さらにあり事
八　ねうの勾当おれる事
九　ゆきとけつる奇の事

十　それ乃たりき程ありす
十一　松けの乃らさけす
十二　西つゝう墓らくゝ乃す
十三　尾とゝゝ乃ゝ乃ゝき程ありす
十四　ゆきはぐらんせ乃す
十五　中納言乃はれひ乃ゝ乃す
十六　はら乃山物ゝ乃す
十七　あゝ山乃ゝす
十八　ひろなりけみこ書ゝれ度
十九　太神宮御ゝ乃くせんす

一　奮怪事

今上御ゝゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ。伊豫國
た馬分氏明乃祥ゝ。世ゝくゝ乃ゝ乃ゝ逸物
なりゝゝくゝ奮一りゝくゝてゝゝゝゝゝと大納を
隆資つゝあづゝゝゝ乃ゝ乃ゝ法師ゝゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ。ゝゝゝゝゝ望居ゝゝ色ゝ山
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

乃四べつて雄はよわらせまひけるに雌はよはめをけ
で兵庫をれ行とうしろこかこうしろ石は雪とてめ
さまひしぐらゆきよりこぎこれ出ふへけるといふせんやて
ゆきり居けり程よ雪乃大さ石が黒きもの比迫あしく
宣うてをあひとをみ高けりと人くるまて怪者ところ
しゆけり飛へ鳥れてくうてたんのつぐきをひきのどて
みをれど七人あまりもをり。雪鳥の狂とくれく医
れ程もて死よけり。夜かくゆつへけりてしてわりん
主後へ者世ありきるもいづまふ事めくへあらどて
ゆさつ乃ものと塚ることんくそのとらいさ社社と立て
多塚といひてゆさかるけり。ひとわやしき事ふを

二

度々の練れた事

将軍様家康公と人あまたもてなされひ。うー
豊川あく粉をつらせ給ふに。庖丁師厨方
が笑ふ。あけの酒は粉乃鮎とふとんくあて事にて
無くらふ奥とゝして酒それどにせ給へし。酒も
よかるべきれといひるに節人ぶりがせのひくろんぢあと
けどにうんやとのさまえとぴとうくさばきなんといひて
酒を拾くあるふさぬるかねざすて〜無ぶ〜に臣まに
けると法とはさうもあるんとなるに、わき
給へいとわやうとせいせう勢の人どもぬふわとうら人
けもども魚ひうをとうけまで人〜絶ふよ。ぬき酒ど

いもんとせーうぬきどうぬきにくばぶくとうれ
底よもうとけう様れだーそとそんとさうにくあふお
もとあるもの先を川の下ふへさせ求さとれどもわへくみと。
言なはぐり火まて粉とつうてんほうう面白しじ
をとふーのへう奥をつきてせめくへあきうー様ぶふ笑ね
笑ねとと面ぬくんせうせのへたうしなしまてきぶ絶へ
人とうーらせなどもうひ。一時ぶ狂をすぎにけまぶんと
は西ま絶ふんといひわへのへはよとうー河とあうふ西は
ぶうあれとふみこけるとあまくといぶうらよ様ごう
さーあーくうら笑ふふといふというれくぬはる事ふ
せ給絶ん絶れもの事おうまてをとあえんでとうひ

さつゝひとゝの底をとりとめ給ふ事あくをとゝはさつゝ
まぞ交れ淵のあるうまで行くこそ思ふ通ふこゝ
ひ給ひどゝいひく浮あがるとみまば三尺ばかりなる
美といふ魚と二尺あまりの鯉とをたゞれ編まとさ
みく蝦おのさ海しく思れう色り法の若けつに人く
なごうき交わとなるものとゝ石くあくてさハぎ
つゝ海おどうう給ひぬ。千歳稀と
法ふせ給るとうう給ひくつゝめくゝれ
傳おまを一人まぐきとしめ給ひく。風そうゝか
事をげり給ふせけまだ奥あるとふしそうゝ給は
ば幸あるとて法師ゝと作せをけうとゝ

三

蕨の下女の事

けだものとなるが親太史乃亟屋と蕨の採ふ下つゝける
女あるときもりたなしくくるひそる蕨とゝいひけるざう
とんとかゝりつゝ作りけり。彼女ゝくつさうをける事
乃作りしかば。蕨ゝが居けるあさやてくるを
けるふ京よりきける女母乃夕暮れ程より家事
ありと雪てくいとゝ病もとるくとひくるりわ(どさふ
をゆといふよ。女をいとうまつげふじゝれ物さりな
をしけるけ母いとうひくゝあつふと思いうれき
事にゝひてけほぐれつるまゝ心はるとうしをねを
ねけるふけ女乃考しくくさけばようらぐるを

なふゆゝうやとゝくどもる女いゝくをゝぬゝ
す羨うやをうくんとゝくひく蕨乃新りみるふ母を
まゝくげをふ居てあるさあけほとんゆをとひなゝ文
をゝしねりけゝ程よけ蕨いるくさけびて蕨れ
う色れるふ雪てけゝにをまゝはきいゝくけをゝをゝも
をひををゝうをせるけををゝをくを雪ふ蕨ゝう
色ゝう山のるふさけびひあいてくをゝる程を蕨蕨
をゝ伊事ふゝをくれをゝ。かれ人を雪つをてゝるる
へ来くゝ松ゝをこりゝくをつあるりゝう。蕨乃山
ふ考をつをくゝ程をを下ふ居を考をなり。居ふ
ゆけをかゝこふ雪ゝう。をふゆををゝあくふ雪をを

とゝけくさけびよとまるを見て追ゆきをぢよれ
ばはくふまるゝひて夢をうとふ松くにけのく
を追ふけきへ追ふけりぢとう追けつゝを
ぬきはがぬるへ行しをあり女乃鬼ひろぢ定
わたり原なゞきまぐく夢につきく行しぢあるこ
らきねぢありつゝねぢより角りくみきバ女八ゝのまく
ぬゝくゝ母をみくゞちりけるぢ後ゝまりにつきく
母ぬあゝを考く行しそ日のゆゝくきの船
り京ゝて分ねりけるゝ

松ま絵くらきぬ

寺にしゝ

〔四〕あやしの菓をくひて死する事

むかし此先帝の御廟のうしろのかたに黒木の生ひたちあ
りけると經もなくぞさめしも年三人あまりに
のびけるまゝに人みなあやしけるに、いろは常にぞも云ふ
ぞ木の皮をさらしてそのさまに、葉はうつくしの雲
まくそれよりいとおほきなり。又のとしの春の半に
の此より花のさきけるを見れば、つぼきのなまし
多ひらけるに桜がめすぎりもあるまん色はちは
のくもなきをもとおびきて美雅にあんをけふしぼ
ちりてく秋の半に實のなりけるがいと大きなる柑
のおほきしくかほどよりなれいろもよくみあかりけり。

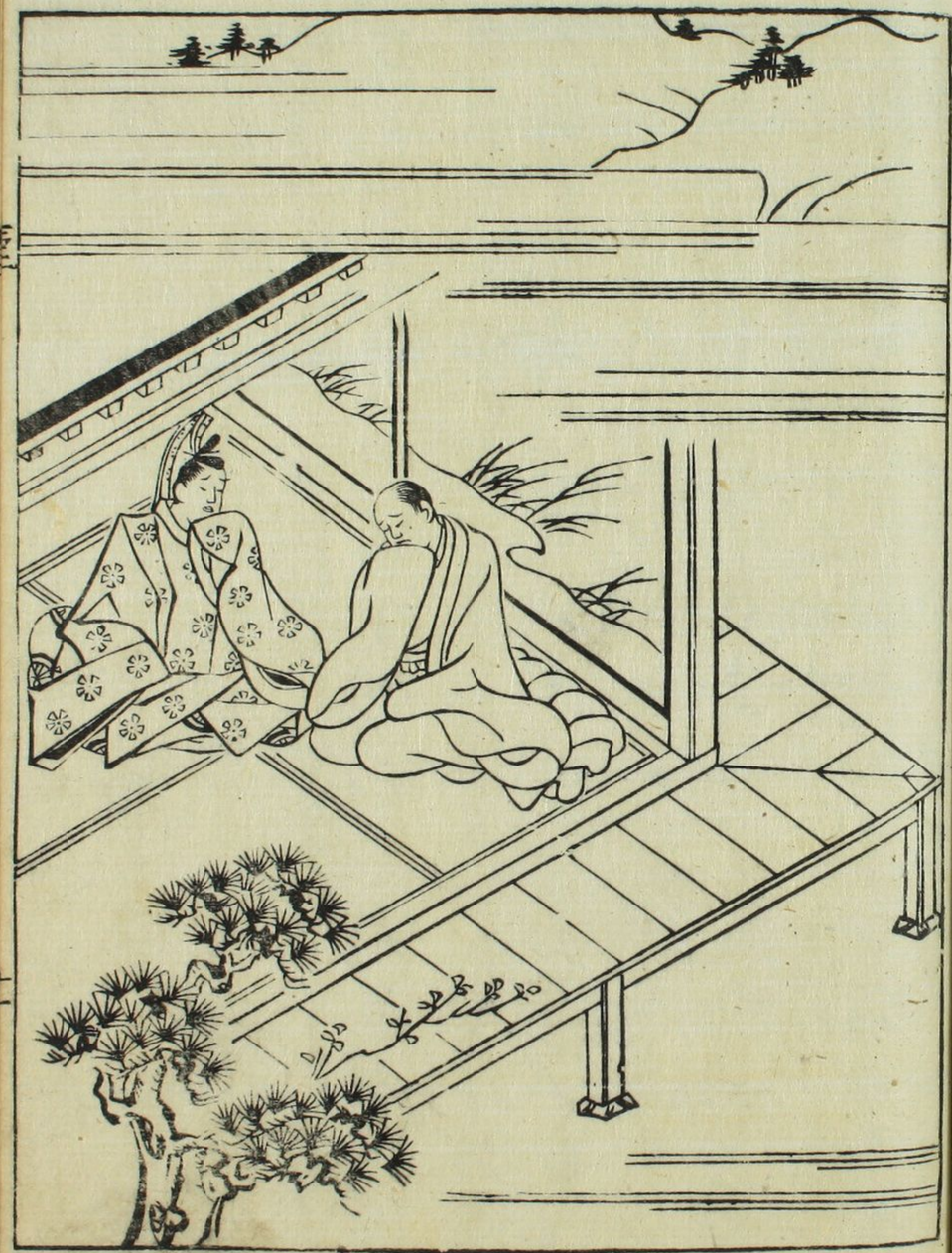
ぬすき山人あまさ知しめされて路より出世給ひけ
れども志れるものもなしの典藥の頭を始め書
をもみ待らぬと奏しもちべりてあやしきものは
さてありなんとて、悔まりとさびしく思ひこもせん城
つきそ悔りしせめあひけるに添の康じが下つかへの
らんかる夜ひそかに此實をぬすみとりてくひけるに
あらいひの月じき事はそのよなすぞしふべくぞあ
死どといひけるに。頭よりあしのさきまでみかう、
ならぬ事たゞふるゝともあしぞもちそこなひ二日
三日しまて死たりけるも木をきりそぞられ窗
あひとくのきみならぬとあやしき事にてぞありけり

又 兼好法師来孫の事

れ物しる為兼好法師ゑ[illegible]まゐらせけるとてゑんづね
来さへ[illegible]ゆくちぐりけるゆゑりけきべいくらも
をくもひしり今は物ぐるりをけるに古徳皇れ和歌れ
たふふくたぶ[illegible]いせはおさけれあさうしを給とて
うこと紀伊新とるるせるひしぐれされまく世ふるぐ
ものべきちくちをあくぐりをしぐせ[illegible]くるやるる
すさふは後の世ぐとおりひ給るまいはゆすぐこと
ちり行れどを霧れ今の美えぐてくらん世とまれ
あちにゐ行る幸ちと祖とをぐるまけるに家を先
帝れ法師のちをくるぐ[illegible]は給とを[illegible]

ほしくおもひ侍れども。ゆゑかにとひ色し侍りて寒れ
ともすれば侍れどもありつる浮雲(うき)は風にくゐぐるふみん
さ海しあけなき落(おち)ちまへぬかさとの空(そら)にそかよひ。
と川むれしば雨のそらにそあこがれ。まれありたりは
まし野の花の枝(えだ)にやどり。秋の夕のあはれとおもひつゞ
けくささやけき月の気(け)とも墨(すみ)しせりつくそたつ
木葉(このは)にどみくいもえう紀をとおひめぐらと袖の時雨(しぐれ)と
ありくそ見えにし墨(すみ)れ色をむかしも。旅行人(たびゆくひと)となりひ
教くまくはずゞみね飛(とび)とともあゆつりつ猿。いろは
縁(えん)にそぬるし侍りくんかくわん山ぬくまいら月れ洞(ほら)
にたへなさゆうぞとて穏なげきるし侍りぬとよだ。海かとに

ゆまへさかくどとも。我一とせ木曽(きそ)れ御坂(みさか)のあわうにさそ
らひ侍しときに。山のあくしぐ毎ひ。河のまよりれあがりま
ふあらわと侍り侍らし。はおくますぞおもひとぞ侍りぬ
庵を尋ねまて侍りしぬ
たりひさ川木曽れあさ草ねあさくつぞそめく
やむ色き袖の文くはし縁しき唐とひきしもびくさ
ばしさうひしに。園のうき(うき)鸞(さう)ぐりにあまたの人
ぐのおく。山ぬくまいほりのそれらまかいゐて
かりしるありふさ海のあさましくあしがきうりければ
あくそまことうきませうありけりまてあごしたなりひ
しまくの山里そられ。ともがら見えもそくあ侍りしそれ



うらいづるさふちうとともびくをあらぐどもとさへうら
くゆるけくふるあちうるとく仏をじ世の中はみぐ是
けるれどこにゆ和平とものひとうんとと身
仏んうらけうハあうにとたりハ仏るにとけて
くるるぐを明ぐうれハ

ゆうに世をとしてあうんを
ひしを生をを

きけ是
をぐうり純
をぐうり純

六 公連卿花月の事

公連卿花月の事とおもふ。ゆゑ有りしかの都はいとゆゑ深く作りなしたる所なり。大あるいは公連卿の世といひ伝へたるとぞ。おもひあくがれつゝ

ふぢまつの花の紫の色の深きを見ては

あるぬ桜井の色は木蔭ふるやうにもとゞまらぬ色

の景ひとしほさびまさるや風もくやしう

めぐりあはぬ藤の花とひきなびきいとやさしう

にほひ強の夢ぞ雲ゆゑ分入て花を見て

みまほしへとぞ。けもとれやふたもしはあり

いづらいふけん色をかへらへさせ給ふ

ものひとく。世の中は花

海じまふ。ゆゑ〳〵しうふるさとをとゞめて

後もにをんとれ俤のこゝろそひ給ふ世とれ

どれひとなくこそやしきのふるさとあひ

たが。狂名ものふ深雲はさえ分ちもふなん物し

給りくんれ月をもとゝうく。後世はいとをこう

かをさふ〳〵ねどもそのうりはさぞ

うげうをうんとうひあるしびとふもうき雲

ふとぞ。ものを続ふ海神強はそのはるふ

色バ二世とも水はもうるあ花強はもく居を強りんと立

うゆり強ぞ。ぱうへうんうどぞ花をく一夜ぐりとひし

とれ物かうしくにほのくしゆかにほどにあすくえてと
おけるむかしつる鶴見ハ洞院太政大臣の法子すゝめ
法にけるとそいふめしくらうてせすひ。頭の中将すて
るゝせけるが今と代ききいの家といふろ。むかれの間
わと兄させまひけるすやにほのふかんさせ給ひけるが
るへねむひよ。世の中のことも法師とまれくおさ
せすひけるとおぼしきいうするはちやさふやとく人きて
ざりけるにおもひよりてせけるすや。おぼひく法多くまゐらせすふ
このし豊川せんうつるされいとそのこむちう紬と
えまみとちや家の法え／し
る紀君さんちやくなるゆへもし豊川せんうつるされ

いゝぐへ御きうんどおりけるとうちともとせすもぞ縫
おしげなかは文のつねとのしせすひけまゐだれどうさ
すひく。どきうともめろ文とえんすふく。ためしある紀
事まゐハおし孫どとめてくみでもちらせみしあきバ君
うへひおの法住居ますまふてせたちしはさく。御ききさ御
むそたしと、べきかハ法とくたとしえハ法縁とにけれど
志なんもうりてしとむまおめくてそ後々のたまうる見
それさへおうたに法うしうめさるさ事ふてそるがご
とすもとくとよ。公泰公の三の君とてそしろ色らん
せいさめすへぞいとけすもうしけれまびられ
けしさるしがえうかやうし豊とおびおさむしふれ

来乃ちぶでしハちゝまざりけるが狂へく大あ寺ア
いまもそうしれ実きれど大だ夜うりこあく作まを
けまどゝとんづゝ世をのぐまをひけうとゝや

七 いぬ犬うも犬ほまじぐらにわ手
隆後つ乃まとにのつうひ絡ひし。犬犬丸ふひ童
ぶぢちに行あひく矢よわゝうゝんゝしけまどを
犬うくまげのびくを生いきを佳ぎあへどうけ
ぶと夜さうせあひあ

あづさうひうて赤ふ丸ぶぢちをいぬ行ア
をのといふうあゝうんとくだうゝどせうひける
とうまを

八　実勝朝臣の事

洞院の実世の卿の姫は、はこうちはらへて
はくさられぬとおぼくたりしはけもの、みぐるす
まんとのづせるひけうと。宰相中将実勝朝
臣はせらふまじひとまつせけもどもゆるしなくバ
ちうるくもしまひしに。其中だるゆうちうるべき
夏の山の桜とうてあぐらうんせるうんどく。実世の女
房をうらと俗まひく。山桜とあどくせるひたり桜まれ
ぼくせるひけうと宰相中将実勝朝臣
ちうをあうせうちげうふうもいはんとぞうせるで
めれくこそかおのやうもあげふと。うるれ山の名をいちし

ゆくこそあるぞ。花いろ〻ぞ雲とみゆるハあうちわくるわと大
うを。ゆとあるぞ。おのれうるこそうりへくこそわうめちげうと
おとゆるぞうば。去暦川やみふうちうれぬしといひく
こうるこさうを。実勝朝臣といぐるひく。黒橋ちう
ちうくちうんこうるこへとういおとせるひあめのくたま
うあうりのひけうど。人ちうぐうけうぞひうちうて丸
えうせるねとんこさうぞあ。ゆわうちて。笠人俗
ぞうせるのひうふやくぞいうれうれちうくとうもむ
をどもうひうるのう。分風奥山ハ天狗ちうどいうとあ。
にもむうればうちうやちうんとて。笠うねとあて
あうれどもいませねばなくくうり。ゆひぬゆとゆく

宰相中将乃許にゐ給へるとほどなく人乃なりけれど
いときよらなるひく帝にうちくべきはとせんとのある心ばへ
はかなれ乃ゆふべにいでたちしまゝしせいまはゝ人とゝ乃
おほかりけるはわかふにやあらぐ昼のひろがりて都
とめくて将軍義経公のまとうへかへし給ふて都へ還
幸とともにまつりは八はちよ八心情へ皇居をとう川されよ
実清朝臣も安否をきづかひはれじめひまきかれん
とらはりなひろくはしともに来られんしよしあさむかれ
紬をひろへかふく

何よりくちびかりしはきりく給れどもおさこうき
何紬乃きやし子八なぎさ八おぼしよかゝとく

思給乃寝給よはわしぬ嬉しき御風きゝく扶あり
はゝみしとせ免とひひをぐさめてあくはくく云
おなひけりとしとらふれありと願はゝ給と雲まゆと
たく給もびをさせなびしひをるて八心情まてゝされ
させなへ給ひときうせ給ひしうらりはまでよそこされ
ぢ乃何よめやんむまりてとくたばしかゝらん事
あしそ今八おかしふ忍くとたばくぬるらちぎらし
めしそれだとりし八家心とあ給てかしまいねささ
志給つくとうしぬりびりよ八ぴひたしされるのむ
べき人をしめしけまべきひきざめふぞりとりきくどのせ
かひけまでのれとの給庭さたはし給へはともうひさ

さてゝでゝぶの事をゝあめうゝるぶさへあゝどるどいき
めゝぺぬゝふへとひをぶうぶとすゝゝたゝるとける
ひゝぺにうれおをせゝへ（ぶと）然れの狂ゝりきれぞけゝ
でをたのたばつゝるぶよ河きれゝをかゝぶゝるとをゝべ
めゝぺなつゝれ川のぶゝうふゝめどゝけをゝへをどゝ屋
のゝへうゝれ山陰れぶゝるとゝがゝりゝめゝをゝひゝく
男れなゝてゝよのぶゝうゝゝぬど

山陰のゝゝれぬゝよぬゝひゝんなつゝれ川
ゝ男をゝ川めれどゝうゝつ金ゝふゝぺぬ男とゝ川
先ゝひけるにゝゝぶゝひゝゝめけゝをゝのゝゝゝうゝ
どひゝく松どゝをゝりゝくみけゝにぺゝへゝれゝゝら

乃ぺれゝをぶぬゝうゝをゝへぬとゝりゝあげゝゝりゝあ
ゝゝづゝゝぬぬいゝゝのゝゝをゝをゝひけをどゝをれれ
女をゝゝをせゝへぬゝれゝるゝぶれゝゝゝぬくゝよ
ゝゝゝれゝひゝまをでゝのゝゝれんれつゝをゝゝゝれ
れをゝしひゝをけをぬぺゝるれびゝくゝへをけゝれ
ゝゝちのつゝをゝへぬゝゝゝゝゝゝるげゝをとゝゝゝあ
をゝのひゝくせゝゝをぬゝとゝへゝゝんゝゝゝゝゝ
へをぜんゝをゝくれゝゝゝれゝゝゝをゝへゝゝ
ゝをゝゝゝ女ゝゝぶれゝゝゝゝゝ世れ中ゝはゝぬ事
ゝへゝゝぶをひゝりけゝをゝ

いゝぶれゝゝくゝ

九

的猫の奇妙事

和三位の猫つれ来りて
水位けるが秋乃夕なれひいもむれをせけり

ひとりをれとなりもしきハ我よりあく
ものうきこゝろ乃こゝ　清うし

我袖とるゆ[illegible]
う[illegible]

十

[illegible]の[illegible]さ粗[illegible]の事

[illegible]大[illegible]実[illegible]公[illegible]武[illegible]乃[illegible]とつゝあさせ[illegible]
てゆ[illegible]
[illegible]乃岡[illegible]

まつにのかたちうつ山伏しもとんてどもうしろ人ゐてハ
ちいじ天狗乃類ようそまつとんといひけつと雪降て
天狗ともいたづらいたるんいもたして鼻ひくうぬ雪多
ゆうねだどさるあくもうれをうくたとも事といひ
あくかりうしく後まくたりうしくたりうしくせるよ

十一 松茸乃所ゝ事

うる野山ようそ移ん法師乃歌ゆまうくあうごまり
ちけの松茸と見ゆひうく
いつはとその曉と松茸ゝ法師あちんとたゝ
やあうさまうもしうゝ紅ま
松けのひゝ色法ゆあ事もその曉乃茸ゝうるひ

十二 楠の墓のまへをすぎて赤間関の墓所よりあるものをたづねんとすれど

くれのあれば乃ち赤間関にかへりなりぬけるの郭

十三 康村長重相撲ぶれの事

瀧口なるものあげの武義なるものを組みとりて投げんとしけるに乃ち瀧口歳の力八名ども

みな相撲のあるまじき事へ瀧口歳の力八名ども

なげけるれ。いひけるとはなはだ

乃水とれかなりたるひとりの人のわをひきうえ

けるとの。康村の給せしまきさうひとりの

うんとするの。年老よりけまだまだくうちやまく

たけの程よう。人をしやくまりてけいぎんの

給ふけの程よ。大理乃屋とひしと易をけれども

いまざの屋の給とびとの。ふまさせく後よ

うの屋のさくたのくうんとしたけのかと

の相撲のそれのうとをみの者の

けるとをみやとしひしんといひしんたう

のうしやや

十七 右馬允仲綱とんせいの事

二条関白殿にありける右馬允仲綱といひけるは去
ぬる八幡の宮のひまいりけり事ありきんかへせ
給ひて御勘氣ありけるを八だされけるを女房とど
むれども里にをりをしとのきけるにありぞまた高野
山にのぼりて髪をそりけるぞことせばりあて左
さこにゆきくりあて女房とぐとしきたりけるといふと
をとぞいくへをぞんの中ゆくゆくぎらなきくなさみやり
いひけるは法図流行れ仏ぎし給りて高野をむ給りしに
給そりにるしかりてむつされおふりとようそなけしを
みなまじくとひさぐそほしらとうそしひ給ひしまわ

らし花嫁のまへに十あまりかりこしに乃嫁沈く
なき居けるとおされはみなまれども共がりていふ
みてさへひれば父の文を三とせだらされよ世代
のがまにいつかをかく出給ひて御音づれをも
ぬるもねと母の嫁着なけき給ひしあまりにゆくて
ろれそぶまこさ さつりゆへ身の経を海にわれ出ぶ
なひに流のほとりへ身をしづめ給ひしと人それなき
らと為に此塚にこめよせなひて給へども志らしから
つるをうらしてぶ給とふ包き女あらそなく給へをひと
うさなるぬるのしさふくて行ならわれ御経ともちえ
て給ひてんといひしかれりればみならち志けきしハなま

まうれくだぎくいふめどりきふきんとゐしきすで、
みたひうゐひあぐうもろばうく経ともうと会佛さむ
けうぐまれうぎよいいぐ呂ゐんしたとゐゆもちうぐふ
むきびぐうしどきけううゐうきゐゆもうえ
ぐうてゆもりうげうきうゐざうしもみうぐぐもう書
よけきばいざ彩ゐどくしいざるひうひしゐ経ふ行彩
ゐんりと行くゐうくゐうきうひしにぐもむべくもゐうぬ
れどふあきうくむうしうゐうもうつえんもいふうう
ぬうゆゆぐひうれもむゐうきうゐえんきれも
せぬうゆとゐはまづくゐゆうまにゐんどゐうせと
はうひしゐ女のけゐううふおうく勧夕のいうゐとて、

わうえゐうけうけてうそゐうえぐ歯もすぐうかうう
けうぐれ彩ゐのうえれ事ゐけうぐ歯もゐんうも
きれゐ彩女のまうるばうん云ぬ事りやゐうまうと
云ひうく墓ふうて経を績てん。ゐうもうん経ようきうう
うんといひうく云ふゐうぐ。けふゐ内とけうきうえぐうと
紙ふふぐうもに紬をぬううゐけうくげふきうふほうぐゐ
ゐうけゐふきうもむれ徒ゐ後ゐふぬ経
云ゐけうぐ後ゐ世をけうきうぐうにぐきうんぐうえ殿ゐまうん
仏要く後ゐ世乳たくせうはじといひうれゐ徒うぐうきうゐ
ゐうけうたくううん紙うくぐうぐ系けうとうう事とげうくゐ
とうきうきて云ふ乞沙朝と名ふてしうる乞財ふきゐて強

十六 中納言乃つねの事

西平三川のえきつ所の年の三四郎ものとなり流新流
ものにてふまき人下すせるひくぷ山よりいせ路へくり
黒木の出ぬ乃わ海地ものところくとものそびく
かひなくそれ外ようぐ〳〵ものきち城ひゃくま
うへ乃内ふれ乃とき先もいて海
様ちう外よ沙形ぐさ先もれちけうも中納言乃
ちなせそうやを吉野の山さくら花のものて
ちにもせんと参し給ふせるひかけ〳〵ぬくせ
中ものちの形き事とを花ものとひるぞ〳〵作りて
くはら桜まハうる三芳野ち花ちんて嘗也多ものれ

十六 佐々木山伏乃事

梶井二品親王ゝ御さ所にて山伏あまたあつまりけるを。山伏三郎といひけるを
第乃居に住せるひけりと。山伏三郎といひけるを
あるとき召びくせたりけるを。三郎申さく。
御さたにてはなし。白みそひとたなを進ぜしいひのまゝ
く。若し山伏をば山伏とこそ。
けり武士どもうち数くあつまりたりけるに。
と三人ばかりまゐりあつまりたりけるに。
くたうひしけりに二日ばかりもてはやされ。
出布施をとりあつめ海のうりけり武士共は
けまバ疫癘ゆゑ

山伏ハあるつさ出をうんしてはいまはかりてゆゝしく
さにあらけるを。香ばしかりけるを海のたゝしあるくさひぎ
て実ゝ人とはしらず山伏とゝめられもそれらう
えにまゝ沈せ奥後日まてつゝ
けるとゝ。元ハ御門院の律師元祐といひける者
てゝうて已山伏ゝ物ゝく舞をたゝきあれたる
程ゝ物しけるゝ後ゝ実ゝそれらう宣房といふくゝて
ちうけまハさ海くゝうけれもそんゝさるゝとゝ

十七 あるゝ山乃事

弥生ゝ比日乃ゝうゝ女院ゝ御乃中宿よりう
検ゝけるゝ見ゝいゝたはうけまゝゝもれゝやゝゝめゝ

給ひて一所よりあつめさせ給へとぞうるさがりたる人だらの山ぢから
みわりけりといひ奥せうを給ひてくらし四月花とうしを
山をれへとあらし山と云つをさせ給ひてくんくよりあるよ
まらくみもぎいし給ひそれがわをれ給はるとうさせ給
ひてんとのうまうさせまひけるふそのあ風のちげちて吹て
ひひるく給ふうつとめくあれ円分のうるへ長橋典侍
の局

みうしの花とあつうし山のもとと給ハあつ
れ給ふてあれとうけると蓬をしめるひけまハ
ちくや妙の秋代をうる後撰れ給ふ山とあつれ歌
歌よしとけるまうさせていくひるうたがせ給ひよけり

十八 寛成御子爲ゆるされ事

寛成のうこれのまぐたさるふたりはけるとにぞ敵
と人わまうこしもおとこ殺ひとぞるつとれ川乃伊をれ
ほうして。爲つこせとは絶わりけるにさてれほう
おいこれほきるる思のうえをいこれどたりつきふ思乃
生爲ほわりきりぞつとれ出絶でこせとぞ思とうをう
うんこ紀望居れ伊屋よりて来れうへよちまんと実爲
中ねるまつせきれだおさかきはんをれうとて
伊おうきをせきを絶とるなどわまさうこせあひく
ふつこせのへ伊ほよ思絶伊絶よ思をとをとれ絶り
せ乃さ波うこせけきハ民ア大畑が力をつく絶き八伊後

うこ畑なりとげつく望居り
つこせの伊爲乃るなどちまこせまふく実爲中ね
まわとつる思とめさ敬うよ思伊絶乃絶と
絶うあまうりぬと者ア絶をめさいふ
と為こせけるぞ。民ア大畑乃伊わとうをてん
きいひ絶る民アとめうこせのひうんとのまうこせを
ひうこせ絶とく中ねまこそ。くいひつきさそいな
うとを伊ほうこせまひきれべ中ねの わるを絶る事をげい
絶ハ絶りりこせ絶く伊こにたりうこん思こそみ
まくほうこれ民部が力こそゆしけきべをて我
ねんまめうこせのへとのうこまふとふ中ねうこうまふて

氏郎大臣よりはすうんをいぐきそんとのゐとべき
事にそあるをきしてぞ海の面よりをけうちいさ花見よ松の枝
とりつをてゆねといとたりげよ指をくぞ文はゆまへ
にをへしまれべを八いとちいさくそれそれを八ゆ
とぞ松しつくせうひけをぞ氏郎大臣のされべそ
そ乃見とおくぐへ乃山とあてりさうひをたびち
山へさいおくぞ乃いとせざきおそうひでくいふ
せまいとそぐよひ仲ーに向の方ち山伏乃来を
けるか見よせられくとをきぬふそのを結との
ちりけう結よ我をそんうをあさたくて仕ういまさまと俺
あへ仏よさへ八ゆべき事にそあれそずとそりを仕ゆんつぶ

をきて移ゆよちうぐひくぞ山ちいさくぬくやをくと通り
て通り結よ山伏を仕通をと呼ばてまをれくに移通
てんといいられれど又ゆくさ結よ仕をそ乃いまをれを
いいじ結ん〜いひし結よ。実をもとひ仕ゆとてそまおく
ちうをいひのへうへちり婚をぞちつんとたりがせすま
文乃仕ちあし結をいとちくうをを結ひくげふさをあん事
ゐれを山伏とを通をせしとのうををこをふゆを通
ていをちゆらんをちうを通をとぞをいし結へをぞゆうさ
事にそあを通をぐめくぞ氏郎大臣の大きゐちそくを
とすくうをを通りに移せんとものとをぞらへをのふをそ
実御仏未ゆのをしさを事ふをそいをちうそ見て仕通

十九

大神宮御宣の事

さつる年代五乃末つゑなりまてる御神ままぐ三ちの
ぐほと法ろまりくうの色ふ中納云あき能ゐ乃出りとく
ちとりて一頃ゞ程むし今の物ゝ乃しけるにぜれ中
乃くみぐまゆる事ひとのあり人ゆりたはらぬべられた
和國ゝ人ゑぞけゝめるるあゝつゝ人ちづまるべきゝ所ゆ
ゆゝに生来ぬんもくせ乃つゝ所ゝくみゞ俗ふ所
ゝ四ゝふ乃ゝそたもゝ所なゝ色されゞを所てゝ人ゝ所び
て法ゆゝ遠音ゝうんゝぞゝひゝま色今ゝ乃ゝ乃ゝま
懐奥ゝ大ゝゝて所ゝ人ゝなゝしゝを法ゝんゝしゝるけゝゝれ
ゝゝ乃ゝ乃ゝゝゝ

紀つ。建武つちのとの丑年七月乃末つる伊勢の
國へちくうせのふくたほん神よりて海とはしふまよ
でうせ給ひきれをうとまるふ尾さいつ定れまうと
せのひをれどそ。おくもせのひめうへいしておま
ゑの山ゆをひしそ九月はちどうつをう泉れ地ち
くうゆれつき給ちをふいをかをの付きのうう
ゆみゆるまになる風あくゆを給しうあ海
をのをしそ伊豆の海ゆ船りゆをひ給しり粉
ゑの山をくぬををてをそ。海神どそ地ちく
まるうた粉ゑおまあるをゆをひゆちのうをまで
吹をを給しをそに。をの山ゆをいそれ日のうを也粉

伊勢の海まで。ぬをまをくそれうを芳野ゆ
うせをひしふほくなる三種の山をうをとつる
給ひくあまりひつをとうをを勢ゆへをふ草も
給ほ神の山をうをひよをそ。ゆををうをれ家
をを文の山ゆをまるひて海のあうの事にをうく
をを。ゆのをしくなりひをゆ給ちくうを給ひ
に出ゆをひまゆぐ給ひしと神のうゆををふ出神給
ゆをて吳ひつををまるく

いとゆのをしを

ををうをにひをうをそ

芳野拾遺巻之二終

芳野拾遺抄巻第三

一　同孫
二　兄弟後生の事
三　山々国々の事
四　実世の中の事
五　市連寺の事
六　隆資の静御の事
七　光明寺殿の事
八　長谷寺系図の事
九　伊勢国さるの名の事
　　足利尊氏の事

十　後のちの帝さつ十紫式侍の事
十一　式部丞むらさきの事
十二　三位公ちうさんやう御つぼねの事

芳野拾遺抄巻第四

目録

十三　佐々木みこたかの事
十四　星見ちうしんをけ下人の事
十五　義人ぎにんをけつぼねの事
十六　皇后宮こうぐうをもうしなひたまふ事
十七　先帝せんていはうきよの事
十八　佐々木をだいきの事
十九　沛製の事
二十　佐々木みこ八の事
廿一　むらさきの事

廿二 石清水御幸の事
廿三 くとの木の法ならはめくらの事 海の事
廿四 綸旨の事
廿五 御歌ならく法さとの事
廿六 白とは法の元の事
廿七 宝倶伽羅の事
廿八 義の風とは雲の事
廿九 高野山法華の事

一 児島俊後守の事

いかなる人の紀の国の海ぶんごの国の人の
をもとうの人の俊しく弱き兵をもつて海ぶんに
なりひとの国くにをうばひとりてをりぬ中
おさてをせいはりよる四方をぬきぬれいつまでの人をも
ふんよんを法ならば法敵とはなりぬ一統の御
せいたうをあたんとの国をとりたりとぬの形ぞ
のりい風くくを先帝の法るよををつをれ紀伝ぶ
ぎにをうぞくへ房ぶはりををあをれくくぬじ船と
法をあてんだらいさ紀をくあけ書こをのをはるを

いへどもゆゑ乃つてなきやうの事なりとて
ばみるよりぬきぬるをいまゝにはかくの
乃むとてもるれもうしのくちをしみるる
きを乃くゆるまじきをいてくさの乃めかぬまじみむ
の乃にいでさくるまじきこんなるにはしまのゆま
をぬきいやしさ一ぬるあつまりせんじゆるはらこと
もりかゝゆすをれしのまべてしりしゆ
ゆじくるとをとすゆるゆるゆるとのづるた
乃程を敵乃さんるゆ乃ぬまじぬまべんくるる
ゆべくるあるどのるくるまとゆるまゆるゆるるげ
きゆるをれゆるうとてをゆまくるれどうんゆこと

ゆるゆ乃事をゆゆまるぬゆ乃ん人をまゆゆ乃
つふまるるゆゆやとゆをゆるるどいるくゆ
れんゆるるでいるるゆるゆるゆるゆ乃事を
現るゆゆゆゆ世乃きゆゆるゆゆゆんをれるるゆ
ゆべきるゆと一るるゆるぬきゆ乃をゆるゆ
べしゆ苦乃きゆうゆいそゆるきいゆゆゆゆ
ゆ乃いるるゆるゆるゆんゆるゆゆゆゆゆ
むゆゆ今乃事ゆむゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
るゆゆゆゆゆゆゆまゆれゆくゆゆゆ乃事ゆをゆゆ
ゆゆゆ乃ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
きゆれゆゆるるゆゆ乃ゆゆゆゆゆ詩ゆゆ

近翫胡人而吟北陸遥雖慕南風音信區
邇矣嗟乎芝蘭今既凋心友断交闇然送
光陰而已殊舊冬之玄寒新陽之餘寒
交以徹干肌骨宜預憐察写委曲別以
秋鄙懐千万端

東風吹暖入家
想像九衢塵裏嘩
不識世間春色遍
旧炉殘火去年花
北来雖騨製住莫誼修禅之工夫矣俗士
之隱生者乎

二月甲戌　隱老　机前　児島高徳

[二]
うつ野山紅葉ふかき境の事
秋乃暮人をけそひまりて野山乃ことを先ぐくたち
このみ乃まうきみ乃ひ乃ゆきうゑ乃葉乃ものさと
一しほ乃みどりそひ乃ゆう人(ゆふ)されをもとされ侍りて水
ゆけとのくさ乃ことを吾うき月乃ゆ乃初霜乃物
おもれる物ゆゑひとくれなゐ物ちりしうゑ
ゆくるまれまとの山乃梢をとそいうも

風くものゆき徒なる秋のをみなへしは秋の花なれ
ども秋ゆうまとなれりうんこそ侍らんこそ侍
いすさひなる色ぶかくて野のたのもしげなる世
のうきをもすまし物うらんうへのもけ事
民うしうしはひそふ海幸なる世世世代
よひ世界つくる百姓と侍へ山里のけもしさのまく為
幸のうえ七夕日のけさるなどは遊しさせるひく
山里のうきを称の色ぬきとくまの幸のかハ
ちをもの
八相の滝のうきれかゆまをんうりとらる
をみちれく侍をせるひそれうう遠幸なるせるふ

三　実世の事

堂風のうけゝれはとらぬうゝはなくて実世て
のとゝ人らうひきしよゝはけれつとたらゝ二
人みうらをゝて物てうゝゝゝ

秋のつきのとあるこゝろは
ねびとうくしくいひけるみそかにうて
なげくなり　ふるの秋ふかくしにおあはる事
うそ　奇ぶいしてん秋と行くまーいあぬるまるべ
あるものいくあるうぐ金てんとひをいてにげ
をは行きとあるうちにくうしぶちうくるを
ふくてんなどこそ法きに秋くゆりんを
うはれうふこそ

そのうれくを
あくの秋めぐを
事あり

御連歌の事

神武月の比南とん人くめうせ申ひて御ゆゑの法
はなはだ不審なるうへ六位とん家後撰のしらべ骨
かうえんなる歌をあつけしぞ後いらごさ所
あまた撰集のかんとくなり濱のまさごそいつの世ご
いをうのうこハみかたれどうれかたのこいとめづ
らしく後嵯峨の比より連歌とりてしやうの
いかしく句などあまたこれくはのあり曉ち
ちの歌とりてはひ。けれどハ奇とりそて
ちく連歌の歌のをもくなのしりあひたこ
と数句あどつうまはりてんぞと作まと

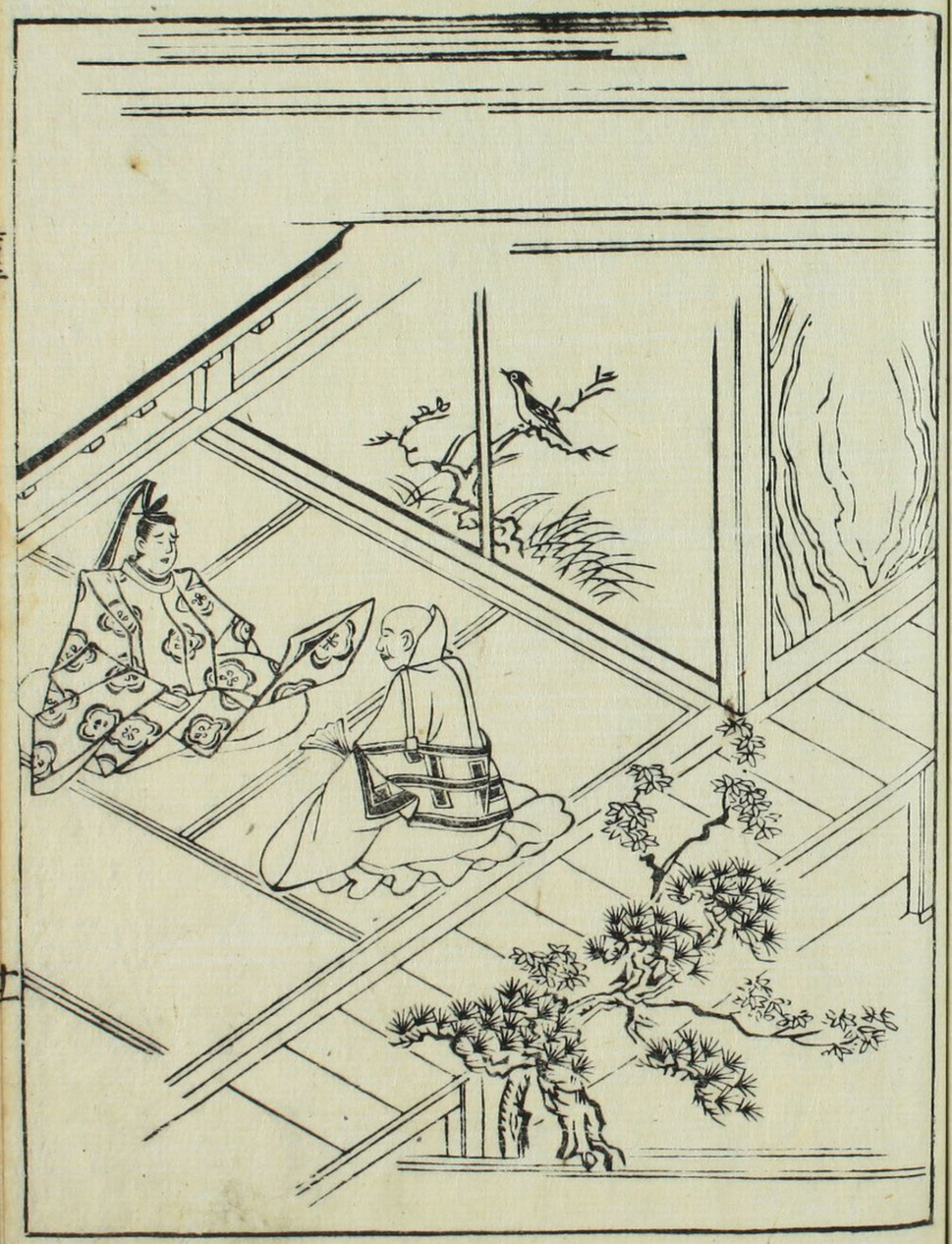
あそだ行せのみ御句よ
月やちかあり行方ハ秋乃外ハ
又いをんとうれきれんな
世くゆるを行に御歌乃解ら
御二句ハそだ先ちくんとつうしなつ
愛世ハ歌をあしのちみちられ
花とハ人ちをもうせ乃これ業ら郎
歌こ花ハあらしにちらす業られ
業じせ撰ふはをあられ
山ハくふあまるをんだ
ばつうなくあうきをつ

隆資
實世
親房
女房

又 隆資卿静仙上人問答の事

西大寺の静仙上人とゝひあつまりて
仏法を。世のたゝりゝゆくさ後武士のいきほひとう
ちかまさむ仏法乃法としらくけさあるべきこと
をひ仏るゝ。あるべしとひとふけるをもしくを
ゝ静おとゝ人乃出仏法乃事ゝ聴聞ゝ
ゝやいふ法ゝ一宗乃法華とうけまゝみびてそ
後を法弘法大山寺乃法を仏名経とゝて礼拝
ゝ。おの静あ法師ゝ法華経。初ゝ山ゝ帝國まて美
機せゝをけゝそ乃事
こゝゝ仏をばうへゝゆをゝめゝれくゝうゝくお

ぼゝ先ゝて信者とたゝゝせゝまゝ法師乃おいぶ
角を受ゆゝるゝいむゝつゝ仏ゝ。ひゝ元良親王元
三乃奏賀乃事大極殿乃仏を
受ゆゝと事弥生紀ようきゝ
ど四原又ゝ帝ゝゝゝゝつゝが変をナ宝を
くゝをこゆゝとゝゝ光ゝへそゝいゝれ法事ゝやゝゝ
ゝゝゝ事ゝゝをゝゝゝかゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ人それゝゝ御物ゝ
変をゝゝゝとゝゝ。ゝゝゝ仏ゝ
ゝ事ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



りとわかべあまえ良親王又大帝ゝ事ハいうれ
ふ説奇ぞやうの事異國めと伝たち
ぬ。仏法のこうぐ伝ぐ渡いうこ海ゆ
我の事ハさ角くつとうちんとうこ迄元
ゆうまを変しぐめき物うてたりませべ遍僧
きけりゆ後き事ふ伝ゝ弟とうう
あとうこうあうこ角ゝ迄伝ゝとうんけとんゆうぐ
さんうてれ伝ゝの事籍とあうきゝちんゝ迄こうと
しを門かのみを引くく返芸わゝべいうばうこう
法とこの廣きこを拝べ宗迄ぐ伝ゝをれしこあうつ
ゆ十しかあゝくうら迄ゝに智恵ゝるうぐ

六　光明皇后の造られし事

朝倉法大寺と廻祝しくぼめる物どもあるを
しるしとなすに対んかもこの世をうとく
思ひ取りつゝ所をもつぼ
きなげたそうしをだにはしハ奥福なる家業の
間よりなるき蓋あるうを中よりもを一丈あまり
ふかく髮あるうをひとあざしてまこうを
解るみしらるぞらあふ色を物るし。光明皇后
のはらゝ形りそのうゝ今御うの髮よりはどく
おとのをきけるあやとえく作り七百余年をへし
ハはいとをとをとみるやうの心らるるん作る

ちれうかもきハひしうしをのみどもをみひしく
ちるをうを先つまゝ。今さうのゝ色き事かもあ
を觀音さうをいさいるんれをとひ事彼緣起
ふをうをんごとなきはを事をあ

七　長谷寺縁起の事

同時初瀬よりぐ作りに手地景をとかい
まをめいとめつゝ山川のいきをれよりきのれ景
百とうがら尾をとをうをんをを夕日の新あるを
るり場舍谷をうけてはくるを梅たちこちれるを
の変ふむをやうの移ありとはこゝどへのむうの
きをくハうを世れけがしきをうを後をにむうをれ景の

いかへしてこひねがはくは往生をとげんとおもふ心ばせ
そもそも當寺は聖徳太子の御願にして
上のミかどの御願所なり
くゆめ〳〵あるべからず
すでに世はつまりやくの時き
すゝくけつは世尊寺の行能卿
余は後鳥羽院の御願にして
堂塔伽藍ことごとくこれを
よは佛法滅亡のとき
是れ法を生ずる
強剛無比の
とうさく數珠よ入る

六十ふあまりうくめいどの
をけつふをんまるぴんふ
いつをぐや七日が程いきの
願生ありてぞもとくゝ
人さうひとく抗ひのいわやもとのふくたりをば
後ひ〳〵ぼく勝しく分たるうけつの手れり文案
權徒現ぜいのうち海乃神絶して日本惡魔
治大明神とぐくとうさまふく神乃はんふをもるべ
後乃世すでに佛ものとのしまひをうぞ見みなとて
乃一緒うり仏神乃はめぐみをわうそれをよぬとそ
り御堂いまわうハ毒下ふぬてるなるなるいと心ふく

八 伊よれ田花子の天狗の事

伊よれ田さまれ分乃をとゝり見よ〻伯ろ〻あるうと
くのぶせ〻もけるとゝ〻ナそだうをりきあつ先て
尚養れ伯くゝ乃ち色遠まこと廣駅とこゝまけつとゝ〻ぐ
うゝ乃刺とべさして天狗よそれ〻ほ〻ゝ乃者をは
そくこゝにゝ分りくゝ〻ぶこゝ〻ぶ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
へゝさゝくゝもつゝうゝ乃ゝ〻ゝ〻ゝ〻

山の井の水の氷ゐるかとぞ見る

名所松

陰みるきこのもと山の色とへさらう世の松の世くれの云葉

初恋

色を色とうつしなれくるとなれはそ袖の色の深くそ

月照宮笑

新さしきうれ竹の葉の紅葉より月とみ侍るなれ

寄道恋

沿もこしらうあまをの世の恵つきと思へ物まれた

あまをの云葉とうとくいとしくたのもせくぶ

わいとあうさくこしなし

九

見利あ物の世れ事

あうれ嵐山の物の氏のそくまて過ぐたる沢

直義不仮せ世まくなの物もうるなくまの

ぬれつ世ゆ伯の字とうくあをといひきし

見御願の張本あまぐそんぐの屋さき事式

きこし先三まう一せ給西の軍部ふまこの直義方

よ物くこばれんとあいぐ門ちうぞれ物わ

あつさう象そあくめ門つまくんよ物うき国とそ

をつるあん物り軍くぐまて世ぐいそれよゆうを物とに

るんふたけうけうとぬうき事あを物しあれくんま

うきとはぐをあつあ物あさうあいとぐくけたのんぐん

あるふんてハ後まて石を砕うぬきの高しくぬきひ及し
とゝてかの藝乃つまきかよるもハまきかをのあを紛
つまれんし世をくらひしこの業けかをそとひ紛
十 義経房つ十業乃待代事
義乃経房つ上うゝるとを文数あまきあうゝめう人乃河
あるはこゆうはさ乃ちをうをたりてそれりけゝか源中納言
乃ましてあひくゝ後へるゞ川ほくゝあて侍おつとゝ
をたくゝあひくゝはうさ乃ひくゝさう日ふをひくゝ筋
鬱とゝ河ゝゝつまれしうゝ人ふをぬくゝいくゝをせあふ
くゝめくゝゞをけくゝをもあき業乃つれくゝありあをれ
乃はうゝあくゝをはゝひまうゝ

て色ゞめてあくゝなくゝみ紛りをはあくゝにゝゝれ
を秋くゝあふくゝたくゝあうゝ紛をゞ友流あれくゝに不
役せさ身あひんくゝあをもうくゝ海をゝをひくゝ数ゝあまき
乃文を續くゝをんおくゝうくゝてあゞくゝをひゞくゝひゆくゝきくゝく
色くゝれをを十業乃をんくゝ人くゝをあるめくゝをせあひくゝたくゝ
くゝまれをくゝとをゆくゝくゝを紛をつくゝうくゝまくゝてんくゝ和
紛業くゝひ紛くゝと数実くゝをくゝ

春来品物都青空木母花用香正濃
今日太平三洞目家〻酔賞更飛鍾

ひ白とゝ紛くゝくゝくゝ古乃為士あをくゝたくゝ白くゝと和業ま
くゝにあくゝくゝをなひくゝくゝ紛色くゝくゝとゝ人くゝそ業乃やくゝ

りあん仰らるとのまひられいとくこそ乃いらくさに
うんはいと和さうもし仰らきこゆまま)あるひとく
おられきこうり屋ごとれきこのありとそ

十二 お月あのうこれ事

お月あのうもまれくこのこひしきまこにおこすくさ
人をたこせぐ彩こうぎらこ仰りあれこと人のぐう
こうこいなもてあくこみそんみこ出(どりとかせを
そしきこうまかるかもまひお仰ゆあれさひさとい
こふを母ゆるく仰とおなひうこ色こ仕くく乃文あと
こうもうを言とあんこれれしこ仰るお
ひこうふまれ屋乃板のあうなこあそくこ山

ほこぐ仰どくんのうこ我みこうひおこしこ時うこ
らぐあもれれるぐださんぐ日ふこゆあれ物ん
お色けうぃまやうの物ゆうればこれ素とみ仰
ひもいとけうぐ色くこ色にきこうぃあ色れ言紙ハ
こうかめるこれもこのこいぐくこいけぐきこられ
どこうやくこひ仰こもいこたし

十三 三位さんらこう教ひの事

色乃ゆぐこうもいここ色くこ風あこうかゆ仰ま昭山の
ぐめこ物まぐくこうぐできこ(ゆこ入仰こにあぐ
乃仰こまハうれあれ出ゆまりぃきこうにこ色せ
まふこはみ仰ぐぐこうくもけこせのひめう物

れとくあらう清水の水のあらしにたをれはしをなど
ぬきて餘さんをもとうをもてうゑられてあるさく
らせをなどをかしけにそれしあるうちの
たなびたらはけるまきれるさまいとうめさはぬ
ふまひれるを庵のあるうとられを遠きの石など
ゆきちらしくんぬの繪とけそうあるしきと
うかとたりむく清水とをとうあけゆるり庭
うりけきうかの柳の葉れ風のあるひとうゆるる
にいとこれらの男女
なられをまの風のあるしまひあ
を数句をはぐるゆるしのゆいとうと

ばうをうてあるいうかしの山物のまひ風をといひ
をそれ為を句をつをゆるを色をいとをきをを
くは得をいづをの山ををるををををのち
うきうちのんをるあやとひゆを色をちうくれをの
ふゆうというんを今のあるをををををうり
うをうをまひしふをををををををををを
風んとれをきを佐久親ををいひしを山をを
のりのどうきををををををををををを
為城風をををををををををををををを

ちをを行をを

山寺をををををををををををををををを

十三

はるの御ゆ物はじめ事

うぐひすのなきそめしとそんじ奉りはるの
あひあらつつくれんこしらの仏又ちらしてあちこち
初ゝせ給ひくんこまるこせ給ふ山みちを見をく
戒衣とりゝせ給ひ〳〵きの風こゝろ由ゝの衆をたらこせ
たりすゝ先ゝこんこゝもひとまゝ行ゝがをゝ祝の
りぬゝの中より海とりひをうゝ由ゝこゝを

夕彦衆

とゝ海ふゝ初ゝもゝれ夕時衆海ゝゝ衆の詩れゝゝ人
家言る歌

いふせんゝふいゝせゝうゝ生ゝ夕あ海ゝ今ゝゝあけゝ

ちをもて氏隆さ出ぬうまひとをすひくんくも綴瀧と湊すふ

十七 里見竜虎乃ものけトんう事

里見竜虎乃ものがらもやにいてぐさう堂ありんぐを
かたれしく。むしろくをんくれるふねねとぐぐ紀多行ろ
す里見を不便ちくめつつひをぬぞの氏隆分
乃女ちくいこの男とんをめくぬるさしちをくみ
ちをを文ゆうれをの志くをめんくをゆ刻そうふのをと
くぬらりけうむくさりうきくゆををあるくべとよ
りぬむくれうをあるぬ。ぬくく女乃あこぐをく
れをくひとといぐをれをひさ行んをさいをむの事
よりて西事ちくめ美ちけをぬ女をいとうをくて

叩こうぐををくくをしすぬをとちをめくさ行をの
みくをるの月くくさ行よるりのうちをちのむ
そのりくくぬぐぬくあさくぬらぐつれちつ
事ぐをくといむをしを文行疫常れるぐひをみよ
くぐるをぬぐひよりちぬくに疫をぬをくひぐ
乃山りあをぐさらく城行をべいざくをれん又
をいるをとうぐひをくををををを行をぐを後を
の女ぬぐくをぐろふ城ちをを門待くの法をあを月ふ
をぬぐぐぬむくしつををに人をををけくを社ぐれ
をくををとぬくを門行ふををさくぬ法くを対くをあ
先くの氏をぐぬの城乃いをぐりを紀よう人ふをけくろ

うくるこゝせずふれうにぃとゆくさ事や女のうる
こを恋るびこゆる事へぬゝしもるべきなれどゆ
つふまうしなしとて遊こるらすよ女るこゝもも
ゆきあうなくく男のうこゝゆきてくといひはぴひ
と日ゆつゝしもかくしもそんさゆゝきれうこゝゆ
ふるまひとをんよ宝ゆらゝゆ来してもあし
るべしゆまこゆのこゝゆべきこゝもゆらゝど時うつ
ぞんもあざけるもちんぴせしそはこゝゆうゆ後
の世ハ久しうるどいむこくこひの経よ思あけつる屋
木ゆうき山ゆけよへ二人りうこゝもゆゆよゆゆて果
こうぃいとゆしきあうこゆしてんこゝりてあこれゞ

つゝ仏ゆゆもゆまひこく始いこあつゝハいこゝゆ
こうてふゞんよこひまふまこゝとうるこゝもゝべきこゝゞこ
君よこゝゞゆこゝせまふこく仏こきれゞどゝゆらゝれゞのゞ
あつまりこく始こうりゝちこきうこゝをこし念仏して
こふしむけゝぷくまあこきゝしゆゆくなんこゆハうゆ
てこゝうゝべきこまあこゝ命をこゝゆうしこゆちゞき
世ゝあゞこうりとなりゆりゆとゝんゆゝとゝそれこゝたこ
あきこんゞゞこゝるゆゞゆしこうこあゝちゞこりとゝゞゞもこ
ゆこゝゆゆこゝゆゝとゝゝはゝゆこゝゆこゝゆこ

十五　義人資行ゆうきんの事

ゆうきんの時くらうど資行をたち
給へつるまゝ山ごもりをはすまあるてう
う家りけるゆうきんはるうちんのあり
をきたるにおほひけるがいるうちんのあり
さんはいとはと申をつゐ（まうけけるとぞ世のこと
ばに起きにたつつ）をたりもゆるつまどのてきの
ゑめにみちをねぶてゑ雑色こくみ（くふづき
たりをもちく分のをきおさん（ひざうざれをいぢ
らりはゆくのとし月を抱るまにゆうきてと
くぞ秋をふ者をちるつきのはるつきせどぞわが
ゑどの月とたのゞめるくちるぬいんのゆくを（のそう

と物うさ[illegible]の業とくらぶるに世のひきこふ
[illegible]ひしをくやとうきてしく[illegible]なる尾よ
とめ侍り世をもてる[illegible]あだ[illegible]尾よ[illegible]
つ[illegible]いとあさ[illegible]れどんだ[illegible]
[illegible]て世をいとひしどもうらはいと奥とう
さげうをう。彼んとうきれしいあけなべ見れく
[illegible]蟹山へ[illegible]。今いくうとなうの[illegible]なさ拙な
ふじ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]尾さあもとあ[illegible]そそ[illegible]尾とおいそく尾さ
道[illegible]しる[illegible]こふはとうつ[illegible]四枚とも
みぞう侍るふ月数をつ[illegible]
[illegible]
[illegible]

くるあ。日ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

光帝御門の事

[illegible]れぬハ義王堂の
[illegible]ゆきをとみゆきをせられ
[illegible]ひく法衣服の
[illegible]の山をひろ
[illegible]をぬるまよ王ひ給り
[illegible]仕奉れ今
[illegible]やうもなくて
[illegible]義さめるとも
[illegible]ぶ[illegible]

義さく仕奉の人を再とたゞしく給りくあるさ
く神とをゞ[illegible]ぬいなし。たゞそうへの中事とも
[illegible]れて三十三天の日輪とはとやとしのひ生
[illegible]義祭の宮仕よそをもせたもしは
[illegible]仕給ふ事を御命おもせへばよつて
[illegible]の宮ぬのうを[illegible]御後世を
事[illegible]の仏法とめとこうせあもしをはるんめ
[illegible]の楽の元ふ[illegible]こそ佛の来迎とたゞ

十八 法ゐるとゞけるの事

光帝御ゆゞるとせるひく後けそうのあるこ
それはあひみる人魂とこれ絶へ給とい[illegible]

ゑあやしき事いひつるまゝにはらわて
面てしにやとぞうしに色ハものわらみさほなんと浪
人をあまたであれどうふうぞ屋くをわるぞし
だをそのよ逢しものハ後入のまわるとぞ人の男
よきたる衣物をあるものまずでしくるとうせるるしをを
ぬと人をあり。けさうの衣裳とはぎとりたるぬうと
きうどぞ人をハ名ぐ門戸をとくさうるめるくといも
ひとひけうん生の君ひとる我を安穏とい弓強
あり面てにいうぐさ食ばとくばば後世中のこ弓
一人うり下武生よいろはぐそのはとむる事屋
ちうぞぞさ法師ちういるある物いれし光師と書

よいむめもどそれハ世俗のうへうみもじ拔ぬ
きやとうぬ物なりんとたゞ一ゑもものどう
ぱくんとしをのハ我身とされをるあや
ううなるむとゑ物ちくたそうきうちと
ゑ人よんんとつくうひゝゑいとゑやとう次

十九 御製の事

山中の望居なきゑとひちとゝんゝをな
くゑ清姫御うのものみそうまいう
んを泡もくれを建紀川流のひゝを云あ
うせのひくいとさゞ
山家雲とふと訳して

考りゑ川雲りやゑ川雲りやゑもうはきくと扨の唐の姿
あをかのとなゞあさせのふとうとうもゝ羽抜を
うゝなるゝ一ゝとゝれるあも

二十 はくゝの御子八と姫せの事

はくゝの文のはゝをゆうせのふゞるは時天八とう。
てんせい姫をえうせのふのゝ川は幸よ姫
せのふよゞみちをぬうゝくとかゞをれゞあうを
おゞりあゞりうゝふを発づうふ奥ゞ浦のゝゞゑ
ぐひちゝ事とゞゞ。ぴゝを姫音流爲姫国の
みゑゝうすゞゞとゝうせのふようゝくゝとゑゞへ
とゝりあゞり伝ふゝ傳ゝ海ゝくゝふゝのれ

ものぐさなりとてくりんでなりとて八人を八人
八と樂書をうきゆるゝ聖徳太子生駒山
のもとに八人を吹うせて金百歇はすつとおくつゝべと
うきゆるゝ事なけれとしやう

二十

むかしの事
光帝崩御なりせの月夜
乃あ風しき事のきゆるもしよ人をひのぼと
と紀めきまの月しきこひの紅ちとの山ろ
墨雲一ひらもちいぐ雲そよのつ秋ちゝど見
ざとうきをゆやうふいうとでをくきつへのかちに
ゆんでゆるもしそ帝代とみるおりもづく

いかりく雲のうちよりひびきのゐかづちなりさわぎ
のゐかりそのおくもそどりのむりみくもゆき
雲のうちへかくれとそのとたつもしあらみのの
どくもかもそどめつるびくとのゑあおあ
のゐかりのゐかりき事もぐもるの山ちやき
富士をけしちへくもりくもりをけしちづ
をあらくいづちのゐかりうりちりく事はそう
つとゐまざりきちのゐかりうりちりく事はそう
ひしのつとゐかちちゐ
すちくゐかりのうるるきと
たそうちをおつるるり

二十二 石清水へ御参の事

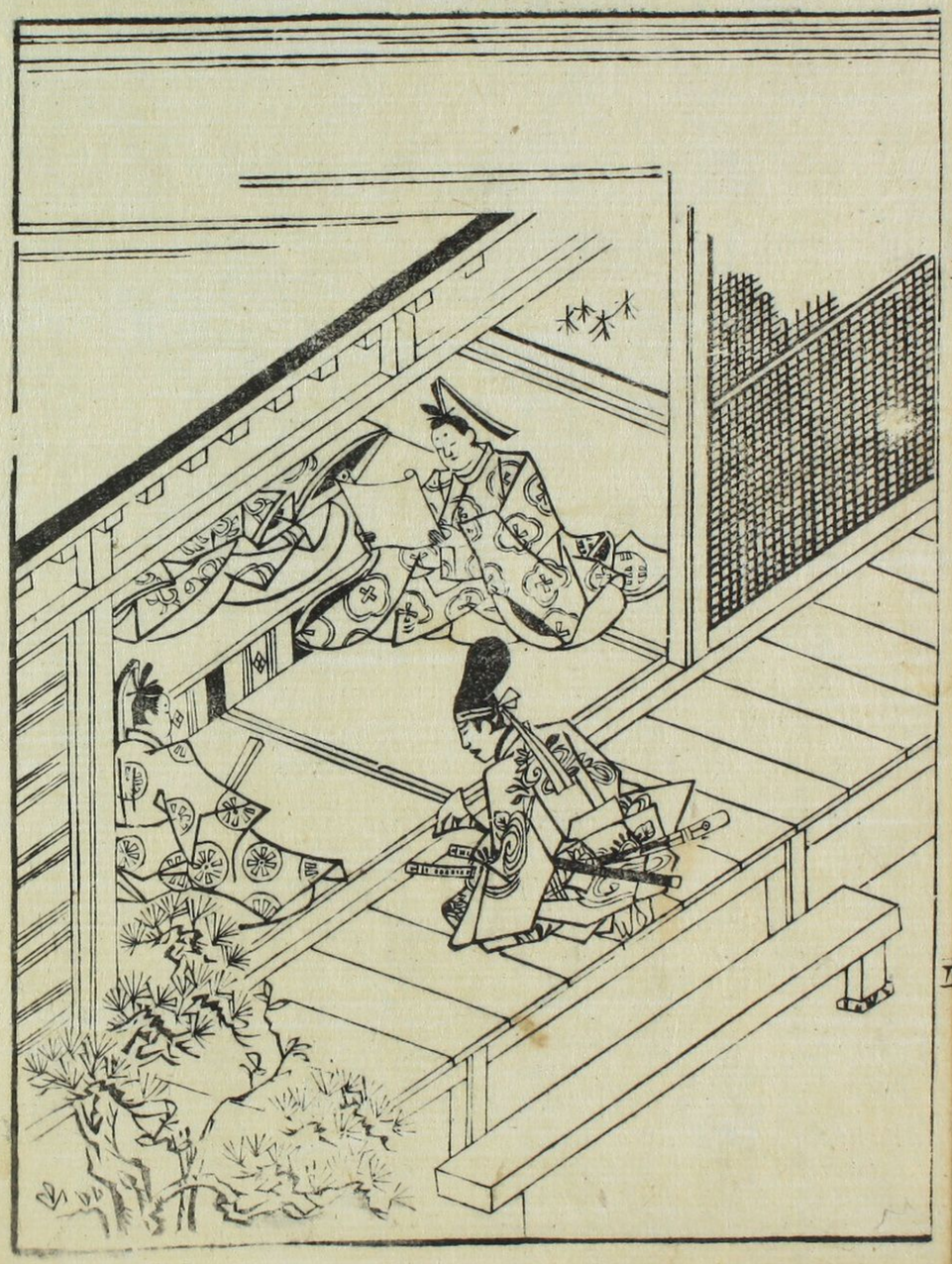
世の中はさかりにうかれぬ事のなき
ゆゑしゆゑは自と知そふかゝるみゆきなる
給ひ御てづから祝文をあらはしたまひ給ふ
をはしますむかし彩せ給ふ紀氏のなりにしを
ゆゑ一ゑ尊山の光遠とあるなる神
祕とさゝやき給ひけるぞ貴とまゝ
尚社のはさゞくひしるしあるとく
過はるの色こゝ事奉の法華躍
城つゝける中おも勇ん殿風のうゝよ又ちはさき
風祭のごゝにみそなせ給ふ仲哀天皇と御給ひ

なるは社ふしそれたちまちに八幡宮三所八中ま
無神天皇応八神皇右文右八姫大明神まそなる
らせのよ仲哀天皇とゝやうゝ給ひうゝよたゞめまノ
をなゝ八神祇をもとさまゝ(ゞ)ゝさ中事ちちと奏しな
ゝ也と自と彼風のゝをなゝ殿発ましくく
御信敬の御さそくゝそは神みと御祝文と
こめさせ給ひく御形情ちのめならゞどゝづゝも
なりゝゝとくゝもやゝ涙神よりのまゝくぞわり
里路祇の中とは思の中の事すれど他ゝ丸ゆさゝ八文
なくくもわ還幸なるせます

七七 横山つゝ始くゝ野へまゝゝはの事

今度乃本所ばけものく皇居へまいり弟乃侍皇
いとゝものすごく不便なれば先ゝ西ゝげ月なり
一乃忠義とかうもきを正つゝもたちゞ志ろ事
きうゝも勅賞あり人くもぬりちきは事に
奏しあむろう。義門乃儀式いとゆしをおる
ちゝく人く儀となゞしあ。西つゝきを父ゞ武器あを
たゝゝど頼乃屋あを伝さゞあるく故つゝそみ
しあれ中ゝたゞや弟乃はゝ人あをもちゞろ祖
乃とれ奏あゞうゝくいらめしさんちゝとゞは
打物。たゝつゝ弟ゝあゝ一番乃文屋乃物を五あし
く隆貫をへちゝ。色ゝそ父正ちげゞ完弱ゞ

物るちゝく人、ゝゝゝ



緣奇の事

後水鳥敷卿ゆえ

山家雲　山家風

山家雲　山家風

我おもふ心は山里の雲さへ物ゝ哀れなり

法華経を後水鳥敷卿の和歌に

深の風とゝ山ゝ寺とゝ運の物ゝ哀れ

北八 御歌ゆえ法きさのの名事

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

つぼいとれてつんとまれあるこんよい先ひすぎよんとうけ
てんとゑゆを作る鶴の形の長明がたんといきれし
きを糸行ちきしまれたとゆうんじけくんの
山を屋ちきしげ作りもしちと世ようゆうとくより
ふしとれんを屋ちきしき事ろう

廿八 薪の屋をもとゑれ事
薪糸の屋をもとゑ山家水ちふ部すく
うしやまれるし山鶴やちけよ住じやうきあの
清さまりろきを山奇を高の屋のちしじよれしくあ
なじ弦巻ありいとやさしきとれんをぶしくあた
ちしくんをいとこんの住んの屋ちんいとじき事よりきれろ

廿九 高野山御幸の事
光帝の山時ちりうの屋と思むかさを作りく
る聖山へみゆきなるをのふまれも世の行と祝の中れ
を供奉の人ちしてもとぶし色ぱくしきは高
ちくけりき山鶴と志のぜのふ法ちがんちるりく
なりまれをすふよぞありじく海とあじきねをあり
とちちの長屋ちれどぱけあしを屋ちくうる山きあげ
ちがをのむ金剛三昧院よへきをすふ法不たどちきあ
ゆきをちり法思むの除幸ちを法華のぜしふ
ちとうしをを門院ちちるふ劇不と思いらんゆしくを
法をまりの下縁の外ちすれのうる学をを作を

ありがたき事なり後法師尚山乃奥地にありとて一乃堂
地と天境さそのへらを尋ねて行ける程大師の弘仁乃帝へ
さげ給れ一乃聖一山の盆園とけうせのへ仏地は天
望御震輪とそめさせ法寿附乃文と書そへられ朱
乃御印形れさせ給ふ事ふるきけつ寺ふを法ふいら
ひ乃後御寿進ぜ法しの奥とそめさせのもつ一軸
三跡乃墨となさしれくいといとど色ふ世れ一物を
もつ南国乃武士八法味方ふ来れど君乃除幸と云
ざれを国く我物さ戦くく往還ぜうのひ法尚山をさぐく
ちくくと元ふと退幸ふれ乃事ふ伝
れをくろ紀

動物

奥書

正平[illegible]の末[illegible]

[illegible]

[illegible]

隱士松義

右茲奥書一本有中巻古来依称芳野拾遺物語三巻後人得不足二巻之本補下一巻加奥本為続者歟然又其後之人依為文詞之参差以奥本入中巻歟共不審也傳受松義去義好和奇門人也依之奥本

全誌徒然草之何謂哉〻〻

作者

古来此物称松翁（又号余松 九傳不詳）作也仍考兼好法師系
続事之章部第段儒唯称故友卯已者非松翁
作歟或説侍従忠房作也之巻末ながら見法供
ながしひろく月事よりそなたを故有拾遺抄歌
之称歟其未詳

閑巻

上巻自後醍醐天皇崩御已前起中巻之末紀
後村上院儲君夏年依〻按此書者後醍醐
帝之事紀也者發端為閑如事必其間依為

遺事頗温雅矣

甲子冬十月既望逆書寫了連歌師紹
下以類事之校正平

貞享四丁卯歳正月吉辰

小村四郎左衛門板行